

心、犠、牲、
決、犠、牲、
是、怕、除、
下、不、排、去、
爭、取、勝、利、



毛主席の
りっぱな戦士

毛主席のりっぱな戦士

外文出版社
北京

毛主席語録

われわれの共産党と共産党の指導する八路軍、新四軍は革命の部隊である。われわれのこの部隊は、完全に人民を解放するための部隊であり、徹底的に人民の利益のためにはたらく部隊である。

まえがき

われわれのおかれている偉大な新時代は、英雄の輩出する時代である。

偉大な毛沢東思想にはぐくまれて、わが国には、榮譽も利益も求めず、苦しみも死もおそれずに、ひたすら革命のためにつくし、ひたすら人民のためにつくす何千萬の共產主義の戦士がたえまなくあらわれている。われわれの時代のこれらの英雄は、偉大な指導者毛主席に限りなく深いプロレタリア階級の感情をいただき、「毛主席の著作を読み、毛主席の教えにしたがい、毛主席の指示どおりに仕事をし、毛主席のりっぱな戦士になろう」という林彪副主席のよびかけにもっとも断固としてこたえている。かれらは、毛主席の著作をむさぼるように活学活用し、毛沢東思想で自己の世界観を改造し、自己の行動をみちびいている。したがって、かれらは革命の利益を第一の生命とし、胸に祖國をいただき、目を世界にむけ、剣の山であらうと、火の海であらうと勇敢につきすすんでいき、天地をやりうごかすような奇跡をつくり出すことができたのである。

本書では、三人の英雄的人物の事績を報道した文章を選び、毛沢東思想にはぐくまれて成長してきたその輝かしい過程をまとめて紹介する。

中国人民解放軍海軍の戦闘英雄——麦賢得は、毛主席に限りなく忠誠をつくす赤い心を胸にいだ

き、一九六五年八月、蒋介石匪賊のアメリカ製艦艇を殲滅する海戦で、頭部に重傷を負い脳脊髄液が流れるのをかえりみず、なおも三時間にわたって戦いつづけた。また入院中には、毛沢東思想で自己を武装し、ねばり強い革命的意志をもって傷とたたかい、すみやかに健康を取りもどして、ふたたび戦闘の部署についた。

人民のりっぱな息子——劉英俊は、中国人民解放軍某部隊砲兵中隊の戦士である。一九六六年三月十五日、かれは、六人の子供の生命の安全を守るために、勇敢に自己の生命をささげた。

ひたすら公のためにつくす共產主義の戦士——蔡永祥は、毛沢東思想の光に輝くもう一人の英雄である。一九六六年十月十日の早朝、銭塘江大鉄橋の守備にあたっていたかれは、紅衛兵を満載して疾走してくる列車からわずか四十数メートルのところで、反革命分子がレールのうえに置いた太い丸太をとりのぞき、千名以上の階級的兄弟の生命を救い、人民の銭塘江大鉄橋を守って、壮烈な最期をとげた。

かれらはみな、毛主席のりっぱな戦士であり、偉大な毛沢東思想がうみ出した共產主義の新しい人間の輝かしい代表である。プロレタリア文化大革命が勝利のうちに前進し、無敵の毛沢東思想が大きく普及するとともに、人びとの精神的様相が一新し、新しい英雄的人物がこれからもつぎつぎとあらわれてくるにちがいない、とわれわれはかく信じる。

目次

戦闘英雄——麦賢得.....	1
人民のすぐれた息子——劉英俊.....	51
ひたすら公のためにつくした共產主義の戦士——蔡永祥.....	83



偉大な指導者毛主席とその親密な戦友林彪副主席は、海軍第一回毛主席著作学習積極分子代表大会に出席した戦闘英雄麦賢得を接見した。

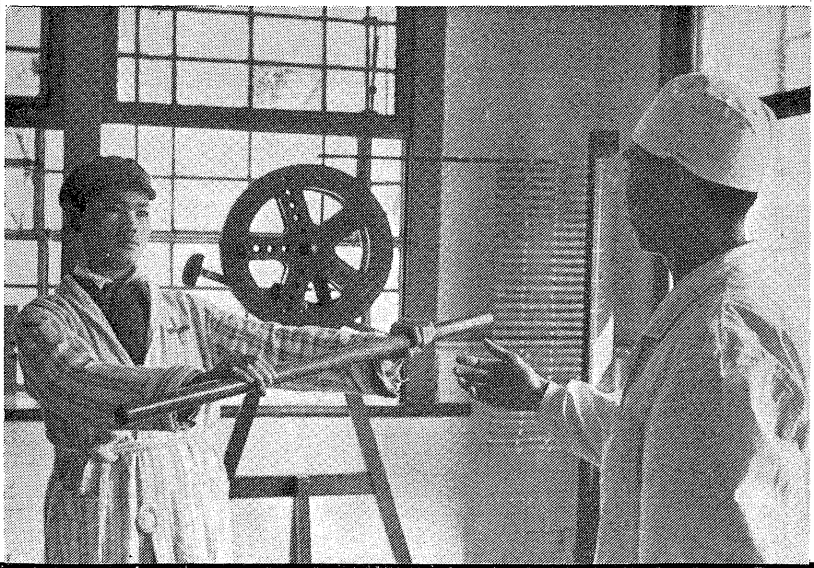


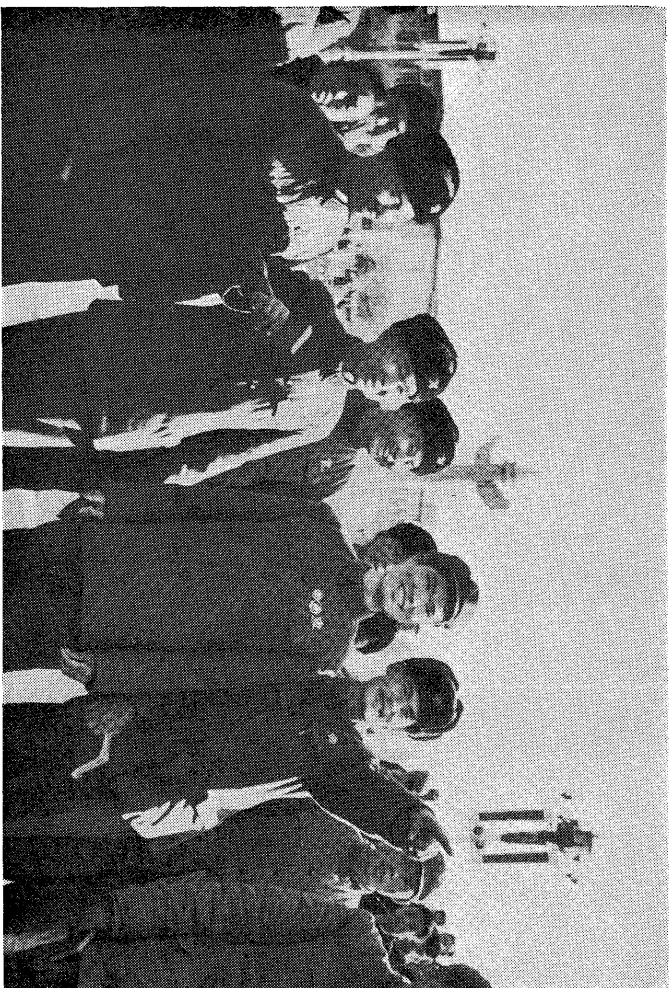
労働を熱愛する麦賢得。療養中でも、かれは自分の力でできる労働にはいつも参加する。



毛主席の著作を一心に学習する麦賢得

医者の指導下で器械体操をする麦賢得





かぎりなく深いプロレタリア階級の感情をいだきながら、天安門の前にきて、機上にかかげられた毛主席の肖像を仰ぎみる麦賢得とかれの戦友たち。

戦闘英雄——麦賢得

『解放軍報』『中国青年報』新華社記者

毛沢東思想で武装した戦士は、もっとも勇敢で、もっとも頑強な気骨をそなえている。弾丸の飛びかう革命戦争の時代にも、天地をくつがえす社会主義革命と社会主義建設の時代にも、無敵の毛沢東思想は、勇敢で英知にとむ数多くの革命戦士をはぐくみ育ててきた。かれらはその英雄的な行為で数々のすばらしい詩編を書きつづてきた。そして、いままた、一人の英雄的戦士がわれわれのまえにあらわれた。「海上英雄艇」の機関兵^{インジェニヤール}麦賢得は頭部に重傷を負いながらも、三時間にわたって戦いつづけたのである。毛沢東思想で武装した戦士だけがこのような革命的な気骨をそなえているのである。

勇往邁進の戦闘的精神

事件は一九六五年八月六日に起こった。

早朝、暗い海面に漁火がちらちらとまたたいている。「海上英雄艇」は僚艇とともに漁船保護のため、巡視の任務についていた。

折しも、蔣介石一味のアメリカ製軍艦「剣門号」と「章江号」がまたもやずうずうしく福建省東山島附近の漁場に侵入してきた。水兵たちの胸は怒りでにえたぎり、こっぴどく敵をこらしめて、人民の生命と財産をまもり、危害をうけた漁民の兄弟たちの仇を討とうと決意をかためた。

「海上英雄艇」の機関兵麦賢得は、エンジン操作盤のまえに立って、じつとメーターをにらんでいた。突然、機関室のベルが鳴りひびき、指揮員から作戦命令が伝えられた。かれは操作桿を引いた。砲艇は敵艦めがけ白波をけたててまっしぐらに突進していった。

青い指示ランプの光に照らされて、機関室正面の小さな黒板に書かれた、「決意をかため、犠牲をおそれず、万難を排して、勝利をたたかいろ」という毛主席語録が、はっきりと麦賢得の目に映った。戦いがいまや始まるとういうとき、かれには毛主席の教えがひとしお身近なものと感じられ、体じゅうに力がみなぎるのをおぼえた。

この漁民の息子麦賢得は、祖国の海を深く愛していた。かれは帝国主義と国民党反動派が祖

国の海で犯した数しれぬ凶悪な罪業をけっして忘れはしなかった。人民にたいする愛情と敵にたいする憎しみが、祖国のために敵を消滅して手柄をたて、階級的兄弟のために仇を討ち恨みを晴らそうという決意を生みだした。かれのキラキラ光る目はいつそう大きくひらき、両手はしっかりと操作桿をにぎりしめた。脳裏にうかぶのはただ、「かならず敵を消滅してやるぞ!」これだけだった。

「海上英雄艇」は僚艇とともに、「白兵戦」をいどむ意気どみで鋭い剣のように敵陣につっこみ、たちまち二隻の敵艦を切りはなしてしまった。中国人民解放軍海軍の勇敢な艦艇編隊はまず敵艦「章江号」をとらえ、怒りの砲弾をつぎつぎと正確にうちこみ、砲火が海と空を赤く染めた。やがて「章江号」はめらめらと火を噴きだした。とどろく砲声を聞いて、機関兵たちは胸をおどらせ、徹底的に敵艦をやっつけようと、たがいに手まねで誓いあった。

激戦のまっ最中に、突然、「海上英雄艇」の後部機関室の左側エンジンが停まった。麦賢得は始動を手伝おうと、ただちに駆けつけた。まさにそのとき、飛んできた砲弾の破片が麦賢得の右の額にあたり、左のこめかみ近くまで貫通した。かれはその場で意識を失って機関室の床に倒れた。

敵の砲弾はひとりの戦士の肉体を傷つけることはできる。だが、毛沢東思想で武装した戦士の、敵にたいする必殺の決意と闘志をうちくたくことはできない。麦賢得は戦いの勝利だけを考えていた。副指導員が応急手当をしてくれているとき、かれはやつと意識をとりもどした。だが、ものをいうことも、立つこともできない。かれはあせった。右手で副指導員をつつきながら、重い左手をやつともちあげてエンジンを指さした。戦友たちには麦賢得のいわんとすることがすぐにわかった。

「エンジンだ。いまいちばん大事なのはエンジンを守ることだ！」

副指導員は麦賢得をだきかかえ、「動いちゃいかん。じつとしているろ！」と感動に声をふるわせながらいいかせた。麦賢得は両手をおろしておとなしく手当をうけた。ところが、副指導員が機関室を出てゆくと、かれは左手でかたわらの機械にすがって立ちあがった。おどろくべき意志の力を発揮し、かつて毛主席著作の学習ノートに書いた「息のつづくかぎり、かならずたたかいぬく！」という決意を実践しはじめたのである。

麦賢得はふたたび戦闘の持ち場にもどった。かれは、後部機関室の左側エンジンがすでに正常に運転しているのを確認すると、前部機関室にむかった。後部機関室から前部機関室へは、わ

ずか幅四〇センチ、高さ六〇センチの楕円形のくぐり穴があって、常人でも、そこをくぐりぬけるのはなかなか容易でない。しかし、麦賢得は頭に重傷を負いながらそれをくぐりぬけて前部機関室にはいり、しかも休みなく機械の点検をつづけたのである。

中国人民解放军海軍艦艇の猛烈な砲撃のもとで、敵艦「章江号」はすでに断末魔のあえぎをつづけ、「剣門号」はおじけをふるって遠くにのがれ、こちらに向けてめくら弾を放っていた。麦賢得の額の血は目じりや睫毛にねばりついて、視線をさえぎった。だが、かれは日ごろ夜間訓練で鍛えた能力を生かして、あくまでも戦闘の持ち場を守りつづけた。はげしくゆれる機関室のなかをぐるぐる歩きまわり、手さぐりでパイプやバルブやボルトを一つ一つ点検していった。かれは、敵艦を徹底的に殲滅してしまうまでは、戦闘をやめてはならないことを知っていたのだ。

時間は刻一刻と過ぎていった。出血多量のためか、額にはいった弾片のためか、麦賢得の足はふらつき、しだいに動作がにくくなった。だが、闘志はあいかわらず旺盛だった。なんとかは、数十本のパイプと無数のボルトのなかから、親指はどしかない一本のボルトのゆるみを発見し、しかも、それをスパナでしめなおして、機械の正常運転を保証したのである。

こうして麦賢得は、あくまで敵をたおさずにおかね精神で、三時間もたたかぬいた。戦友の陳文乙が毛布のうえにおさえつけて寝かせたとき、かれは陳文乙に二本の指をたててみせ、そのまま人事不省におちいった。それがなにをいおうとしたのかわからなかった。前部機関室の二台のエンジンが順調に動いているというのか、それとも二隻の敵艦が撃沈されたかとたずねたのか……

敵艦「章江号」と「剣門号」はあいついで大海のくぐりと消え、海戦は勝利のうちに終わった。船窓から射しこむ金色の陽光が麦賢得の不屈な顔を照らしていた。陳文乙は、はかり知れぬ尊敬の気持ちを抱いて自分の親しい戦友をみつめながら、毛主席のつぎの教えを思いうかべた。

「この軍隊は勇往邁進の精神をそなえており、けっして敵に屈服することなく、あらゆる敵を圧倒する。」

毛沢東思想がつくり出した奇跡

敵の砲弾の破片が脳神経をひどく傷つけたため、麦賢得は危篤状態におちいり、中国人民解

放軍広州部隊総病院におくられた。われわれの偉大な指導者毛主席と林彪副主席はかれにきわめて大きな関心をよせた。党と人民はありとあらゆる手段をこうじてかれを救おうと決心し、全国の著名な医療機関がこぞってかれのために力をつくした。かならず麦賢得の命を救おう！ かならず麦賢得の傷をなおそう！ これがすべての人びとの共通した意志と願いであった。

入院したばかりのとき、麦賢得の全身は、活動機能を失っており、長いあいだ昏睡状態か半昏睡状態にあった。水を唇までもっていてもめず、流動食を口のなかにいれてもたべられなかった。いくら呼んでもまるで反応がなく、どんな事がおこっても、びくりとも表情を動かさなかった。看護班の同志たちは、かれが意識をとりもどして、一日もはやく健康を回復するのを、いく晩も寝ないで、じりじりと待ちのぞんでいた。

無敵の毛沢東思想は、麦賢得が英勇的に「八・六」海戦に参加して敵を殲滅するのを指揮したように、かれがひどい傷と英勇的にたたかうのを指揮して、完全な勝利をおさめた。医者と看護婦の真心こめた治療のもとで、前後五回の頭部手術と一定期間の療養、鍛練をへて、かれの身体はついに健康を回復した。

この貧しい漁民の息子麦賢得は、毛主席にたいする感情が山よりも高く、海よりも深い。敵の砲弾は、かれの肉体を傷つけ、思考力を破壊したけれど、毛主席にたいする限らない忠誠心と限らない熱愛の赤い心をいささかもゆるがすことはできなかった。

入院当初のある日、麦賢得は一度昏睡状態からめざめ、鈍い両眼をひらいて、身じろぎもしないで天井をながめていたことがある。看護婦は、かれの反応の有無をしらべるために、一冊の画報を取ってみせた。一ページ、一ページとめくっていったが、麦賢得の顔にはなんの反応もあらわれなかった。さらにめくっていくうち、注意深い看護婦は、かれの口元がかすかにびくっと動くのをみとめた。それはまるで、なにか話したくても口に出ないというふうであった。このとき、看護婦は麦賢得の目がそのページの毛主席の肖像にじっとそそがれているのに気がついた。看護婦がさらにめくりつづけると、麦賢得の顔にいらだちの表情があらわれた。かれは入院いらいずっと使わなかった左手をかりうじて持ちあげ、そのページをつかんでめくりかえし、ふるえる指でそっと毛主席の肖像をなでながら、限りなく深い感情をこめてしみじみとながめていた。看護婦がつぎのページをめくると、かれはまためくりかえし、目にいっぱいよこびの感情をうかべて、毛主席の肖像をいつまでもいつまでもながめつづけていた。

数日後、麦賢得は危篤状態を脱したが、意識は依然としてはつきりせず、話もできず、ただ一つか二つの単音を発声できるだけだった。看護婦は、ペンと紙をあたえて、かれの思考力をしらべようと思った。かれは紙にむかつてちよっと考えると、不自由な左手で、一画一画ひじょうに骨をおって書きはじめた。一字書くごとに、額から玉の汗がふき出た。看護婦は汗をぬぐってやりながら、どんな字を書くのかじっと見ていた。一字書きあげ、二字書きあげ、まもなく紙のうえに「毛主席万歳」という光り輝く五つの大きな字があらわれた。

これはただの字ではない。この五字のなかには、偉大な指導者毛主席にたいする麦賢得同志の限りなく忠誠な心のありつたけがそそぎこまれているのだ。

その場にいた人たちが口をそろえてひじょうにりっぱに書けたとほめると、麦賢得は純朴な声で三つのつづいた字をはつきりいった。「毛主席」と。

一九六五年八月三十日、かれは中国共産党党員候補になった。看護婦が部隊から届いた党員証明状をかれに手渡し、人びとが熱烈に祝うなかで、かれは感激に瞳を輝かせて証明状をくりかえしくりかえし十数分間もながめていた。このころ、麦賢得の精神状態はまだあまりはつき

りしておらず、看護婦が日常生活にかんすることを紙に書いてたずねても、答えはいつもちぐはぐだった。それにもかかわらず、かれの革命的な戦闘精神はきわめて強固で、毛主席に忠誠な赤い心はいさかも変わることがなかった。看護婦が「麦賢得、あなたは戦士ですか」と書いてたずねると、かれは、「答え、侵犯してくる敵をせん滅する用意はいつでもできている」と書きしめしたのである。

ほんとうにそうだ！偉大な指導者毛主席が麦賢得に第二の生命をあたえたのだ。毛主席の偉大な容姿と輝かしい思想がかれの知覚をよびおこさせ、昏睡状態からめざまさせ、思考力をとりもどさせたのだ。偉大な指導者毛主席が、かれに笑顔をよみがえらせ、高らかな歌声をよびもどさせたのだ。負傷して入院後――

かれがはじめて顔に表情をうかべたのは、毛主席の肖像を見たときであった。

かれがはじめて自覚的に身体を動かしたのは、毛主席の肖像をなでたときであった。

かれがはじめて笑顔をみせたのは、「毛主席万歳」という叫び声を聞いたときであった。

かれがはじめて書いた字は、「毛主席万歳」であった。

かれがはじめてつづけていったことばは、「毛主席」であった。

かれがはじめてひとりで歌ったのは、今東方紅であった。

「毛主席は父よりも母よりも親しい！」毛主席はわたしたちのもっとも親しい人である。入院当初の数ヵ月間、医者や看護婦は麦賢得の病床日誌に、「意識もうろう」、「思考錯乱」、「記憶不明瞭」、「発音遅鈍」などという字をいっぱい記録している。過去のことはずべて忘れてしまったのである。艇長、分隊長や戦友たちが見舞いにきても、両親や兄が見舞いにきても、かれにはまったく見分けがつかなかった。しかし、偉大な指導者毛主席だけは、しっかり胸にざざんやかたときも忘れなかったのだ。たとえ意識もうろうの状態にあっても、われわれ各民族人民の偉大な指導者はだれかとたずねられたら、かれはたちどころに「毛主席」とはつきり答えることができたであろう。

昏睡状態からさめたばかりで、まだ話も身動きもできないとき、かれは看護婦に毛主席語録を読んでほしいと、もどかしそうに何度もとめた。あるときなど、読んで聞かせているうちにまた昏睡状態におちいったので、看護婦は読むのをやめた。ところが、かれはちよっとめざまめて、毛主席のことばがきこえないと、すぐにじっと看護婦を見つめて、「えーえー」と声を出し、つづけて読むようにとめるのだった。

頭骨のなかの弾片がまだ摘出されず、右の手足の麻ひがまだ回復せず、やっと坐われるようになったばかりのとき、かれはテーブルに斜めによりかかって、左手で毛主席語録をうつしつづけた。うつし出すと、一、二時間もがんばる。毎日こうして、ずっと休んだことがなかった。革命的な大衆の訪問をうけて、時間どおりにうつせないことが何度あったが、夜ねてからでもふと思ひ出すと、すぐにおきて書き足すのだった。

一九六六年五月、麦賢得の頭骨をあけて、左額のなかの弾片を摘出するという最後の手術がおこなわれた。手術の前夜、かれは『愚公、山を移す』をくりかえしくりかえし学習した。看護婦に、どういう心がまえで手術をうけるのかと聞かれると、かれは明るい大きな声で、「決意をかため、犠牲をおそれず、万難を排して、勝利をたたかいとう」と答えた。手術後三日目に、長さ三センチの、マツチ棒ほど太い針を傷口にさしこんで、たまった液をぬきとらねばならなかった。これはひじょうに痛くて我慢しきれないのではないかと、医者や看護婦たちは心配していたのに、麦賢得同志は少しも恐れなかった。まる半時間、かれは両手を握りしめ、歯をくいしばって激痛に耐えていた。豆つぶのような汗をばたばたとたらし、全身汗びっしりになりながら、かれはひとことも痛いといわなかった。

治療は一つの試練であったが、運動訓練も一つの試練であった。最初、麦賢得の右半身は完全に麻ひしていたため、ベッドに横たわって、なにからなにまで人にやってもらうよりほかなかった。これは戦闘生活になれた戦士にとってたえきれないことである。かれは看護婦にベッドの端にひもをしばりつけてもらい、左手でそれをつかみ力いっぱい起きあがろうとした。しかし身体をちよっと持ちあげただけで、たちまち頭が割れるように痛み、神経も関節もいっせいに痛み出した。とたんに身体力がぬけて、かれは人事不省となった。第一回目のたたかいは失敗した。意識が回復したとき、頭を持ちあげて光り輝く毛主席語録をみると、激しい海戦のさなかのように、かれはたちまち勇氣百倍して、またもねばり強い訓練をつづけた。こうしたねばり強い訓練をいくたびもかさねて、ついに床を離れることができるようになった。

床を離れてから歩くまでが、また一つの苦しいたたかいであった。麻ひした右足は丸太棒のように重く痛くて、不自由な左足でひきずって歩くことしかできない。勇敢な麦賢得は敵のまえで鋼鉄のような英雄であるばかりでなく、傷のまえでも頑強な戦士であった。かれは看護婦の助けをきっぱりと断わり、自分でベッドのふちや壁や窓べりにつかまって、苦勞しながら一步一步とあるき、一まわり一まわりと練習した。はげしい痛みと疲れでさええられなくな

ると、毛主席の教えで自分を上げました。毛主席の教えにしたがえば、どんな敵もうち破ることが出来る！毛主席の教えにしたがえば、どんな困難も克服することが出来る！毛主席の教えにしたがえば、勝利する。これは世界のどこにも適用できる偉大な真理である。麦賢得は八日間の苦しい訓練をへて、病室から五〇メートル離れている体育療養室までひとりで歩けるようになった。さらに十四日間の訓練をへて、かれの半身不随の身体は基本的に機能を回復した。「半身不随の患者がこんなにはやく機能を回復したのをこれまで見たことがない」と治療師は感心していった。これは毛沢東思想がつくり出した奇跡である。

毛主席に限りなく深い階級感情を抱いて、麦賢得はのどのかわきをいやすように毛主席著作の学習にはげんだ。毛主席の著作を読むことは、もうかれの生活の第一の欲求になったのである。床を離れて歩けるようになってから、かれは『毛主席語録』をどこへでも持っていく、そこで学習し、活用した。あるとき、看護婦は、かれがひどくあわてて、ベッドから戸だなのかまでひっくりかえし何かをけんめいにさがしているのを見かけた。看護婦は、いったい何事だろうと思ったが、かれの手まねまじりの話を聞いて、『毛主席語録』が見つからないのだということがやっとわかった。これは麦賢得にとって「一級事故」よりもっと重大な事故である。

る。かれはいらいらして、食事もとらず、なにもかもはたらかした。やつのことで綿入れのポケットから見つけたすと、それを両手でささげ、フーッとためいきをついて、満足そうに笑った。

麦賢得の記憶力がひどくそこなわれたことは、学習にきわめて大きな困難をもたらした。毛主席著作活学活用の大衆運動を新しい段階におしすすめようという林彪副主席のよびかけに、麦賢得は積極的にこたえ、断固としてやりぬいた。夜、看護婦はひとねむりして目をさますと、麦賢得がひとりでテーブルのまえにすわり、「老三篇」を両手でもって、一心不乱に学習しているのを何度も見た。かれは最大の熱情とおどろくべき気魄をもって、学習のうえでのさまざまな困難をのりこえた。はやくも一九六七年には、かれは話をするのさえまだまだ骨が折れるのに、もうかなりすらすらと「老三篇」と五十数節の毛主席語録を暗誦できるようになったし、三十数曲の毛主席語録の歌と毛主席の詩の歌をうたえるようになった。

一九六七年十二月、かれは二年まえに戦闘生活を送っていた艦艇に勝利のうちにどつた。そして、「八・六」海戦のような戦闘演習に参加した。二年あまりの病院生活をへてから、はじめて艦艇にもどつたのだが、中隊長が声高らかに、「この軍隊は勇往邁進の精神をそなえて

おり、けっして敵に屈服することなく、あらゆる敵を圧倒する。いかなる艱難辛苦の状態にあっても、一人でも生き残っているかぎり、その人は戦いつづける」という毛主席語録を朗誦するのを聞くと、かれはたちまち自信が百倍し「勇往邁進」の精神がみなぎり、頭部の傷の後遺症の影響を吹きとばし、士気は高く大胆で、手足もよく利くようになって、三分足らずのうちに、みごとに操縦の全過程をやったのけた。

英雄麦賢得は限りない感激の気持ちを抱きつつ、「わたしの革命闘争の実践でもっとも深く体得したことは、大海をいくには舵手にたより、革命をやるには毛沢東思想にたよるということである」と書いている。

身体は病室にあつて、心は前線にある

麦賢得は、身体は病室にあるが、心は前線にあつた。毛主席の「人民解放軍は永遠に戦闘隊である」という教えは、麦賢得の頭のなかに深く根をおろしている。アメリカ帝国主義の侵略に反対する世界各国人民の闘争に、かれはひじょうに関心をもっていた。映画でアメリカの鬼どもがベトナム人民を虐殺する場面を見ると、即座に立ちあがって、「鬼どもをやっつけろ、

断固やっつけろ！」とさけび、新聞でアメリカの強盗がわが国の領海・領空を侵犯するニュースを見ると怒りに手を握りしめ、艦艇を操舵する動作をしながら、「敵を消滅せよ！」と大声でさけび、敵機を撃墜するごとに大よろこびで、「アメリカの鬼めを落としたぞ！」と新聞を持って人びとに知らせまわった。責任者と戦友たちが見舞いにくるたびに、艦艇にもどりたい、前線へもどりたいと何度もくりかえして希望した。ある戦友が退院するのを見て、ひどくうらやましがり、さっそく医者のところへ行つて、退院させてくれと要求した。敵にたいする高度の警戒心を持っていて、昏睡状態あるいは半昏睡状態にあつてさえも、いつも敵のことを考えており、けっして戦闘を忘れたことはなかった。

あるとき、かれはまたもや昏睡状態におちいった。夜、看護婦が靴下を脱がしてマットの下におくのをみると、かれはしきりに首を横にふる。看護婦がそれを枕元においても、椅子の上においても、やはり首をふる。どうしたらよいか、看護婦は途方に暮れてしまった。あとである戦友がかれの気持ちに思いあたり、艦艇の戦闘生活でのきまりどおりに、靴下を靴のなかにいれて、ベッドのまえにきちんとそろえておくと、はじめてかれは満足そうに笑った。

紅衛兵の全国的な革命大交流の期間、幾千幾万の革命的小勇将はみな麦賢得に会いたがつて

いた。そのころちょうど、傷の治療中で、身体をささえきれないのではないかと、同志たちは心配した。ところが、かれはこのことを聞くと、「会いたい、会いたい」としきりにいい、傷口がどんなに痛み、どんなにつかれ、食事がのどを通らず、よく眠れなくても、紅衛兵がたずねてきたと聞くと、かれはすぐ元気をふるいおこしてニコニコ笑いながら会いに出てきた。一年あまりのあいだに、麦賢得はのべ二十万余の革命的小勇将と会見した。そのたびに、かれはいつも熱情的に両手を高くあげ、革命的小勇将たちに「よくやった！ りっぱだ！」とさげんだ。毛主席が紅衛兵を観閲する実況放送を聞くことに、かれは革命的小勇将とともに「毛主席万歳！」と歓呼した。

そのころ、話す能力はまだ完全には回復していなかったもので、ただ簡単にいくつかのことはや字を話せるだけであつた。しかし、このごく短かいいくつかのことはや字は、毛主席にたいし、毛主席の革命路線にたいし、毛主席の統帥する紅衛兵にたいするひじょうに深い階級感情を十分にあらわしている。革命的小勇将はみな、かれの高い革命的熱情に感動させられ、「麦賢得同志はぼくたちのなかにおり、ぼくたちとともに戦っているのです」と大よろこびで語つた。

麦賢得の思想には、ひじょうにはっきりした原則がある。それはつまり、毛主席を擁護し、毛沢東思想を擁護する者を愛し、支持し、毛主席に反対し、毛沢東思想に反対する者を腹の底から怒り、なにより憎むということである。二つの階級、二つの道、二つの路線の激しいたたかいのなかで、かれは愛と憎しみをはっきりと分けており、いささかもごまかさない。たとえ病気の発作が起こつて意識がもうろうとしていても、かれのプロレタリア階級の立場と感情はひじょうにはっきりと強烈にあらわれた。ひとにぎりの党内最大の資本主義の道を歩む実権派がつまみ出されたとき、かれはこの悪党どもの名前を耳にただけで、憤激に目を大きく見ひらき、歯をくいしばり、手ぶりをまじえ、自分がやつらをひつつかまえて叩きのめさなければおかぬふうであつた。ある日、テーブルのうえにのっていた一冊の「修養」を見つけると、「こんなわるい本に用はない！」とぶんぶん怒りながら、それをつまみあげ力いっぱい部屋のすみに投げすてた。また、以前に人から寄贈されたアルバムをめくって見ていたとき、そのなかに、裏切り者、敵のまわし者、労働者階級の奸賊劉少奇と反革命二面派陶鑄の写真を見つけるや、かれはカッとなつて、それらの写真を指さして、「毛主席に反対する恥知らずめ！ とつとと消えうせろ！」とのしりながら、こなごなに引き裂いて、ごみ箱にすててしまつ

た。

麦賢得は、中国で資本主義を復活させようとする劉少奇とその一味のたくらみが、勤労人民をふたたび貧困のどん底におとしめようとするものであることをよく知っていた。麦賢得はむかしのことが永遠に忘れられない。入院中、病状がわるくなつて、どんなおいしい食事もたべたくないときがあった。しかし、「憶苦飯」（昔の苦しみを忘れぬようにみんなで試食する解放まえの労働人民の食事）をたべるときには、いつもかれは参加し、そのうえ二、三杯もたべた。かれは、階級の苦しみ、血と涙の恨みを抱きつつ、戦場では、胸いっぱい恨みをこめて敵を殺し、プロレタリア文化大革命のなかでは、ありつたけの恨みを党内のひとにぎりの資本主義の道を歩む実権派にそそぎこんだのである。

一九六六年五月には、かれの病状はやつと好転をみせたばかりで、頭部にはまだ弾片がのこっていたが、かれは不自由な左手で怒りをこめて、「鄧拓の黒い一味を打倒せよ」という大字報を書いた。

それから一年あまりのあいだに、同志たちに助けられて、かれはあわせて三十篇あまりの大字報と批判文を書いたが、どの文章にも、毛主席にたいする限りない忠誠心がこめられてお

り、敵にたいする限りない怒りと憎しみかえあがっている。あるとき、身体の調子がわるくて、一字書くのにもひどく体力をつかわなければならなかった。頭からは汗が流れ、手はふるえる。少し休んだらどうかといわれても、かれは頑として聞きいれなかった。一字一字をすべて弾丸と考え、批判大会に参加することをすべて戦闘とみなしていたのである。かれはノートに「ひとにぎりの党内最大の資本主義の道を歩む実権派を断固つまみ出し、徹底的に批判し、徹底的に打倒しよう。プロレタリア文化大革命を最後までやりぬこう！」「永遠に毛主席にしたがつて革命をやるう」と書いた。これはかれの戦闘の誓いである。

プロレタリア文化大革命のなかで、麦賢得はしっかりと毛主席につきしたが、しっかりと毛主席の偉大な戦略配置にしたがつてやった。およそ毛主席の教えにそむくことには、かれは断固として反対した。あるときなど、危険もかえりみないで、近所のある部門へ出かけていき、大声で毛主席の指示を宣伝していた。医師や、看護婦がそれを聞いてかけつけ、かえるようにしきりにすすめた。いざかえりかけても、かれは何度もふりかえりながら、革命のスローガンを声高らかにさけんでいた。

偉大なプロレタリア文化大革命のあらしのなかで、麦賢得同志は、かれが毛沢東思想にはぐ

くまれたプロレタリア階級の戦士に恥じないことを、自分のたたかいの実践によって立証した。毛主席と毛沢東思想に忠誠であるかれの赤い心は、こんどの階級闘争のあらしをへて、目もうばわんばかりにいつそう赤くなった。

もつともしあわせな一刻

もつともしあわせなときがついにやってきた！

一九六七年十二月三日の晩、麦賢得と、海軍の毛主席著作学習積極分子大会に出席した全代表は、感激に胸をいっばいにして、日夜あこがれていた毛主席にあった。

時計の針が十時十五分を指す。

代表たちは、万雷のような歓呼をあげ、赤い『毛主席語録』をうちふりながら、「毛主席万岁！毛主席万万歳！」「毛主席のご長寿を祈ります！」とくりかえしくりかえし声高らかにさげんだ。代表たちが革命歌々大海をいくには舵手にたよるを声高らかに歌うなかで、われわれの心のなかの永遠に沈まぬ赤い太陽を迎えたのである。

いかにも血色がよく元気にみちあふれた、われわれの偉大な指導者毛主席はその親密な戦友

林彪副主席および中国共産党中央のその他の責任者たちとともに、たえまなく手をふりながら、力強い足どりで人民大会堂にこられた。毛主席が麦賢得と握手をし、さらに親しく病状をたずねたとき、この若い海軍の戦闘英雄の胸には強く暖かい流れがわきあがり、感激の熱い涙があふれ、かれは力いっぱい「毛主席万岁！毛主席のご長寿を祈ります！」とさげんだ。そして、かれは一生涯、毛主席の著作を読み、毛主席の教えにしたがい、毛主席の指示どおりに仕事をしようと誓い、毛主席に握手された両手で、誠心誠意、中国人民と世界人民に奉仕しようとしたのである。

一九六八年二月二十一日、毛主席のはじめての海軍艦艇部隊視察十五周年を祝う輝かしい記念日に、麦賢得は東海艦隊の責任者に案内されて、かつて毛主席が視察された艦艇を参観し、乗組員全員とともに、「帝国主義の侵略に反対するために、われわれはかならず強大な海軍を建設しなければならない」という毛主席の輝かしい題辞を学習した。

麦賢得は限らないしあわせとよろこびに胸をふくらませて、艦首から艦尾まで、上から下まで、とても活発に歩きまわって、毛主席が視察された砲座、機関室、操舵室を参観し、毛主席がつかわれた会議室、船室、椅子なども参観したのである。

毛主席が四日三晩泊まれた船室は、いま、永遠に海軍戦士の心の底にきざみこまれたもつとも神聖な場所となっている。麦賢得はこのうえない尊敬の気持ちを含めて、毛主席がみずから揮毫した題辞を朗読し、（東方紅の歌をうたった。また、各艦艇からきた乗組員代表とうちとけた座談会をおこない、そのあと、かれは一同を指揮して、（大海をいくには舵手にたよるを声高らかに歌った。その朗朗とした歌声は、海軍戦士の偉大な指導者毛主席にたいするもつとも深い階級感情と限りない忠誠心をあらわしており、その歌声は、黄浦江をゆり動かし、祖国の万里の沿岸にひびきわたり、全世界につたわっていった。

一九六八年二月二十二日、麦賢得同志は、偉大な指導者毛主席にたいする限りない熱愛と忠誠のプロレタリア感情を抱いて、東海艦隊の指揮員・戦闘員と海軍各部隊の代表と、上海で盛大にひらかれた偉大な指導者毛主席のはじめの海軍艦艇部隊視察十五周年記念大会に出席した。この大会で、麦賢得と多くの戦闘英雄は、それぞれあいさつをおこなった。かれらは革命的な情熱をこめて、毛主席の偉大な功績を大いにたたえ、無敵の毛沢東思想を大いにたたえたのである。

大海をいくには舵手にたより、革命をやるには毛沢東思想にたよる。偉大な毛沢東思想こそ

が、頭部に重傷を負った麦賢得に三時間の戦闘をたたかいぬかせたのであり、無敵の毛沢東思想こそが、この鋼鉄戦士を負傷にうち勝たせたのであり、二年間の病院生活のあとでも、依然として慣れた動作でみごとに艦艇の機械を動かし、ふたたび戦闘に参加させたのである。

階級教育の第一課

麦賢得は一九四五年十二月、（フロンツェンラオビン）広東省饒平県のある貧しい漁民の家に生まれた。古い社会の苦しみを知らないかれには、新しい社会のしあわせがどのようにしてもたらされたのかよくわからなかった。学校にかよっていたころ、母親が紙や鉛筆などをちゃんと用意してくれないとすぐに腹を立てた。過去の苦しさをつらさを知らないかれに、どうして解放後のしあわせが理解できるだろう。

母親はそのことでひどく胸を痛めた。あるとき、かの女は麦賢得をベッドに坐わらせ、解放まえに先祖代々がどんなに階級敵に虐げられ、搾取され、抑圧されてきたかという一家の苦難の歴史を話しはじめた。麦賢得の父親は十八歳のころから祖父について海に出、牛馬のように働いたが、衣食にもことかく有様だった。そのころ、日本の侵略軍が饒平県に侵入してきて、

いたるところで殺人、略奪、海上封鎖、船を焼き払うなど残虐のかぎりをつくした。貧しい仲間たちと共同で使っていたかれの家の船も焼かれて、一家の生きる道がうばわれてしまった。父と母は故郷を離れ、福建省へ逃げて日雇いをしたが、半年でサツマ芋を一荷かせいだだけだった。それをかついで家にもどってみると、祖父は二日まえに飢え死にしており、伯父も地主に生き埋めにされていた。そこで、父親は地主に牡蠣^{かき}の養殖をさせられていたが、国民党の匪賊につかまってなぐられ、半殺しの目にあわされていた。……母親はつづけて話した。

「賢得や、古い社会ではわたしら貧乏人にはどこにも生きる道がなかったのだよ。この三代のうち、おまえの代になって、はじめて学校に上がれるようになったのに、そのおまえは……」
麦賢得はここまで聞くと、目にいっぱい涙をうかべて、「おっ母さん、ぼくが間違っていたよ。ぼくは……」そういうなり、母親のふところに泣きふした。

苦難にみちた一家の歴史は幼い麦賢得に人生の第一課をおしえ、幼いかれの心に階級敵にたいする憎しみを深く植えた。このことがあってから、かれはぐっと成長した。よく勉強するようになっただけでなく、放課後には、竹かごをあんだり、海へ牡蠣をとりにいったり、すすんで母親の手伝いをした。初級中学校へかよっていたころ、かれは先生が話す革命烈士の闘

争の物語をむさばるように聞いた。また、歴史の時間に階級がどのように生まれ、発展したかをならすと、教科書に赤線までひいて熱心に勉強した。

一九六一年八月、十六歳になった麦賢得は漁業生産と民兵隊に参加した。そこで、かれは生産闘争の試練をうけただけでなく、いっそうきびしく、いきいきとした階級教育をうけた。憶苦の教育のなかでは、かれはつぎのような人びとの訴えを聞いた。饒平県汭洲の全地区の勤労人民のほとんどの家庭は苦しみにみちた歴史をもっており、血と涙の恨みをもっていた。汭洲鎮だけでも、日本の侵略軍に爆死させられたり、焼き殺されたりした漁民の数は百九十二人、焼きはられた漁船は二百三十四隻にものぼる。また、蒋介石反動派のアメリカ製飛行機の爆撃をうけて一度に十九人も生命がうばわれたこともあった。郷林、郷有園という二人の農民は、極悪地主麦名山のレンガをたった四枚とただけで、家族七人とともに殴り殺されるか、飢え死にさせられて、両家はすっかり死に絶えてしまった。……階級教育の展示会では、かれはアメリカ・蒋介石反動派が饒平県汭洲地区ではたらいた犯罪行為の調査表を見た。そして、同じ自然災害をうけた二つの年ののはっきりとした対比を見た。解放まえの一九四三年に、わずか三カ月のかんばつで、貧しい人びとは一軒のこらず飢えにせまられて、路頭に迷い、汭北

村だけでも餓死者が三百八十余人出た。だが、解放後の一九六三年には、八ヵ月も大かんぼつがつづいたが、党の指導のもとに、人びとは人民公社の威力にたよって奮い立ち、かんぼつを克服して、奇跡的な豊作を勝ちとった。この展示会場で、麦賢得は民兵大隊長の麦克復からはじめて、毛主席の『中国社会各階級の分析』について話を聞いた。毛主席は、「われわれの敵はだれか。われわれの友はだれか。この問題は革命のいちばん重要な問題である」とのべている。こうした階級教育は、直接に階級的な圧迫や搾取をうけたことのない麦賢得にとって、階級的自覚を高めるのに大いに助けとなり、敵と味方、善と悪、愛と憎しみをはっきりさせるのに大いに役立った。それまでの麦賢得にとって階級と階級闘争はまだ比較的抽象的なものであったが、いまでは具体的な、いきいきとした実感のあるものになった。幼年時代の麦賢得が知っていたのは一家の仇のことだけだったが、いまでは、それは故郷や祖国の階級的兄弟の苦難と一つに結びついたものとなった。麦賢得はいつもつぎのようにいって、ほかの民兵たちといましめあった。「毛主席の教えをしっかり心にとめておかなければならない。ぼくたちの祖先がうけたような圧迫の時代はもうすぎさったが、過去の苦しみと仇をけって忘れてはならないし、アメリカ帝国主義、蒋介石反動派、うち倒された地主階級のことをけって忘れては

ならない。かれらは絶対に失敗にこりはしないし、敵が一日でも存在するかぎり、戦争のおこる可能性が存在する。ぼくたちは祖国を守るために銃を握り刀をといで、軍事訓練にはげみ、敵の侵犯を監視し、凶悪な敵と最後までたたかいぬき、祖先が経験したような苦しい生活をふたたびくりかえすようなことがあってはならない」

ある日、敵が近づいてくるという知らせがあった。麦賢得は海から帰ってきたばかりだったが、家へかえろうともせず、すぐに銃をとって集合場所へかけつけ、寒風のなかを夜明けまでずつと歩哨に立ちつづけた。また、ある夜、かれは劉良木と二人で民兵の当番にあたっていた。突然、黒雲がわきおこり、台風がおそってきた。かれらはすぐに船つき場にかけて、船の帆をおろし、海水をかぶりそうになっている大隊の倉庫にとびこんで、穀物を運び出した。夜明けに、よその大隊の塩田の土手が決壊したと聞くと、「さあ、いそげ!」と叫んで、またもや風雨について救援にかけつけた……。このようにかれは敵の動向をきびしく監視して民兵の戦闘部署を最後まで守りぬくと同時に、人民の生命と財産を守るたたいのなかでもプロレタリア戦士としての栄えある任務をやりとげたのである。こうしてかれは前後六回も上級

から表彰をうけ、五好民兵①に選ばれた。

一九六三年、十八歳になったばかりの麦賢得はつづけて三通もの入隊志願書を書いて、解放軍への参加を申し込んだ。そのなかの十一月二十一日に提出した志願書のなかで、かれはつぎのように書いている。

「今夜、わたしは民兵大隊長の報告を聞いて、現在の情勢、とりわけアメリカ帝国主義がわたしたちのもっとも凶悪な敵であることをはっきりと知ることができました。かつて、わたしたちは日本帝国主義と国民党反動派の残酷な迫害を受けました。わたしたちの洪北大隊は悲惨な目にあい、わたしの家もさんざんな目にあいました。わたしが入隊志願を決心したのは、それがわたしの責務であり、栄えある任務であるからです」

① 五好民兵とは、政治思想にすぐれ、三八作風（すなわち三つの言葉と八つの字。三つの言葉とは、確固とした正しい政治方向、刻苦質朴の工作作風、弾力性をもち機動性にとむ戰略戦術、八つの字とは、団結、緊張、嚴肅、活発である）にすぐれ、生産・工作・学習にすぐれ、軍事訓練にすぐれ、体の鍛練にすぐれていること。

「革命をあくまでやりぬくことを誓う」

麦賢得は珠江のほとりにある海軍の某学校にはいった。それはちょうど解放軍全体で毛主席の著作を活用する運動がもりあがり、軍隊の革命化の建設がいつそう深くすすめられている最中だった。かれは入隊の日から偉大な毛沢東思想にはぐくまれ、部隊の光栄ある革命的伝統で教育され、烈火のような戦闘生活のなかで鍛えられたので、政治的自覚が急速に高められていった。

麦賢得は学校にはいつてまもなく、分隊長に自分の志望について話したことがある。そのとき、麦賢得はこういった。

「将来任務につくときには、故郷の近くの部隊にまわしてください」

「なぜかね？」分隊長が不思議に思ってたずねた。

「ぼくの故郷は山を背にして海に臨むところにあります。いまは社会主義の豊かな新しい故郷になっていますが、解放まえはどの漁船も血と涙にまみれ、どの家からも泣き声が聞かれないうことがありませんでした。ぼくは自分で自分の故郷をまもり、肉親がひどい目にあったとこ

ろでその恨みを晴らしたいのです。獣のようなやつらが、ふたたびやってきて人びとに危害をくわえるのを絶対に許しません」と情熱をこめていった。

「われわれのなかに、解放まえに階級的な恨みのなかったものがあるかね？ それなのに……」

「でも、ぼくのこの要求も革命の利益にかなっていると思います！」

……

指導員は分隊長の報告を聞いて心をうたれた。そして、かれは考えた。麦賢得が胸に階級的な憎しみをいだいているのはたいへん貴いことだ。ただ、革命戦士としてもっと大きな抱負をもたなければならぬし、もっと高い革命の理想をもたなければならぬ。かれを中国人民と全世界人民に奉仕する自覚的な戦士に育てあげるには、多くの骨の折れる仕事をさらにやっていかなければならない、と。

中隊でアメリカ・蒋介石匪賊の罪業を訴える大会がおこなわれたことがあった。全国津々浦々から集まって来た戦士たちはつきつきと怒りをこめてアメリカ帝国主義、日本侵略軍、蒋介石匪賊、網元、地主らが犯した数々の血でぬられた罪悪をあげた。憎しみの炎が麦賢得の胸

に燃えあがった。顔も名前も知らなかったこれらの戦友たちも、自分と同じ苦しみの歴史をもっているのだ。祖国の北から南まで、どこをとっても、階級敵の罪業のあとのないところはないのだ。麦賢得は憎しみと怒りをおさえきれず、思わず立ちあがった。

「同志たち、ぼくたちはみんな同じ仇をもっている！ みんなの仇は自分の仇でもある。ぼくたちはけっして民族の恨み、階級の憎しみを忘れてはならない。死んでも革命をやりぬこう！」

ある日曜日、麦賢得や多くの新しい戦士たちは上級に引率されて、有名な虎門要塞にのぼった。古参の分隊長は遠くの山頂にある古い砲台を指さしてつぎのような話をした。百二十数年まえ、帝国主義はまずあそこを艦砲射撃して中国の門戸をうちひらいた。ここはアヘン戦争①の戦場で、帝国主義が中国人民を虐殺した罪悪行為のあとが一面に残っており、一木一石に中華民族の息子や娘たちの不屈の鮮血がしみこんでいる。……

① アヘン戦争は一八四〇年から一八四二年にかけて、イギリスが中国にたいしておこした侵略戦争である。この戦争は、イギリスが中国にアヘンをむりに売りつけたことによってひきおこされたので、アヘン戦争とよばれている。

見学のあと、党支部は、毛主席の『中国社会各階級の分析』、『人民に奉仕する』、『ベチュ
ーンを記念する』の三つの文章および階級と階級闘争にかんする論文の学習を組織した。さら
に平素の情勢教育や新聞朗読活動と結びつけて、みんなが階級的観点で情勢を分析し、世界
人民の革命闘争に関心をよせるよう指導した。こうした学習をつうじて、麦賢得の視野はいっ
そう広がっていった。かれは今日もなお全世界の三分の二の人民がまだ帝国主義と新旧植民地
主義の残酷な搾取と圧迫をうけ、解放まえの中国人民と同じような苦しい生活を送っているこ
と、また、全世界人民のもっとも凶悪な敵がアメリカ帝国主義であることを知った。そして、
新中国の革命戦士として部隊にいても、全国に心をくばり、世界に目をむけ、完全に、徹底的
に全中国人民と全世界人民に奉仕し、断固としてアメリカ帝国主義とその手先とたたかひぬか
なければならぬことを理解した。かれはノートに自分の決意をつぎのようにしるした。「す
ぐれた赤い後継者になるために、忘れてはならない五つのこと。一、永遠に過去のことを忘れ
てはならず、永遠に変質してはならない。二、革命の果実は容易に得られるものでないことを
永遠に忘れてはならない。三、階級闘争の存在を永遠に忘れてはならない。四、革命をやるこ
とを永遠に忘れてはならない。五、集団のことを永遠に忘れてはならない」かれはまた、自分

にたいする要求をつぎのようにしるしている。「後継者になるということは、プロレタリア階
級の後継者になることであり、あくまで革命をやりぬく後継者になることであり、わが軍のす
ぐれた伝統をうけつぐ後継者になることであり、階級闘争をおこない、社会主義を建設する後
継者になることであり、共産主義を実現するための後継者になることである」そして、かれは
感動をこめて、まえに「故郷の近くの部隊で任務につきたい」といったときの思想を、指導員
に自己検討し、全世界人民の解放事業に自分のすべてをささげることを誓った。

二十歳になった麦賢得は、すでに自分の家、自分の故郷、自分の国のことに関心をよせるだ
けではなかった。かれは、ベトナム人民の反米救国闘争、ラオス人民の革命闘争、日本人民、
コンゴ（レオポルドビル）人民、ドミニカ人民などの闘争にも深い関心をよせるようになって
いた。アメリカ帝国主義が気違いのようにベトナム侵略戦争を拡大しているなかで、かれは毛
主席の『幻想をすてて、闘争を準備せよ』という文章をくりかえし学習した。そして、かれは
熱情をこめて上級に、学校を出て一刻もはやくベトナムを支援し、アメリカ帝国主義に反対す
る闘争に参加したいと要求した。かれの決意は「一つの赤い心をもって二つの心がまえをす
る」ことだった。かれは「ひとたび戦鼓がひびき、命令が下ったら、すぐに銃をとって戦場に

赴き、世界人民の解放事業のために力をささげる心がまえをしていた。また、戦闘任務がすぐに下りてこないあいだは、「党が自分にあたえた仕事は自分自身が希望したもの」としてうけとめる心がまえをしていた。かれはこうして、敵を倒す戦闘精神を長期にわたる戦争準備の仕事にそそぎこみ、つねに闘志をゆるめず、思想の面、作風の面、技術の面からどんな事態にもたえらるる戦闘能力をみがきあげていった。そして、自分にたいしてつぎのように要求した。

「かならず愛国主義と国際主義の義務を果たすこと」、そのために、「一、アメリカ帝国主義をやっつけ、二、蒋介石一味をやっつけ、三、ベトナムを支援し、アメリカ帝国主義と戦う準備をいつもとのえておくこと」そしてかれはこういった。これはぼくの義務であり、息のつづくかぎり、ぼくはたたかいぬく、けっして敵のまえに屈せず、断固として苦難にさいなまれている勤労人民の解放のために最後までたたかいぬくの、と。

烈火の闘争のなかで闘志を鍛える

林彪同志は、階級がわからず、搾取がわからなければ、革命がわからない、といっている。

麦賢得はつねに自覚的に階級と階級闘争にかんする毛主席の教えを学習し、国内外での激しい階級闘争の現実のなから、自分の思想に階級的恨みの火種を深くうえつけ、誠心誠意人民に奉仕するというプロレタリア階級の世界観をうち立てていった。同時に、革命をやるからには、苦しみをおそれず、疲労をおそれず、困難をおそれず、死をおそれない革命的な気骨が必要であり、高度の自覚をもってねばりづよく鍛練していかなければならないことをはつきりと理解していった。

麦賢得は幼いときから気の強い性格だった。海にもぐって魚をとっていたとき、貝がらで足のうらをひどく切ったことがあったが、かれは齒をくいしばって自分で傷口を縫いつけ、母親にさえ一言も話さなかった。だが、入隊したのち、学力が低いため、ディーゼル機関の専門科目の成績があがらず、いつも二点ばかりで、さすがのかれもがっかりしてしまった。党にたいしてすまない、革命にたいしてすまないと思い、もう学校をやめてほかの仕事をやろうかとさえ考えた。

そうしたある日、指導員がかれに、

「麦賢得、戦闘をするのにもっとも大切なのはなんだね」とたずねた。

かれは、なんのためらいもなく答えた。

「しっかりと技術です」

指導員はいった。

「そのとおり、しっかりとした技術も必要だ。しかし、いちばん大切なこと、いちばん根本的なことは勇敢さにたよることであり、政治にたよることであり、毛沢東思想にたよることだ。このことをきみは考えたことがあるかね。もし勇敢な精神がなければ、敵がやってきても突進してゆけないし、どんなにしっかりとした技術があったところで、なんの役にたつだろうか。きみはいま技術をおぼえるうえで困難にぶつかっているようだが、困難のまえで退却するようじゃ革命戦士とはいえないね」

麦賢得はひやりとした。たしかにそうだ。毛主席は、「われわれは困難を解決するために仕事をしにいくのであり、闘争をしにいくのである。困難なところへほどすすんでいく。それでこそ立派な同志である」といっている。自分はどうしてそれを忘れてしまっていたのだろう。どうして困難のまえに頭をさげたのだろう。平素、敢然とすべての困難をのりこえることができるきないようでは、戦争になったときどうしてすべての敵にうちかつことができるだろう。麦賢

得は厳肅な気持ちで、毛主席のつぎのことばをきちんと書きしるして、自分をはげました。「われわれの同志は、困難なときには成果に目をむけ、光明に目をむけ、勇気をふるいたたせなければならない。」

そのころ、分隊で「物質の原子爆弾と精神の原子爆弾とどちらがおそろしいか」という問題がはげしく論争されていた。指導員はそれに先立って、みんなに学校の近くにある二門の古い大砲の話をして聞かせた。この二門の大砲のうち、一門は清朝の愛国的な軍民がつくった在来式の大砲で、帝国主義の軍艦になんども手痛い打撃をあたえた。それで、いまでも人びとをそれを「功労砲」とたたえている。もう一門は清朝の官吏がドイツから買いつけてきた西洋式の大砲で、まったくの飾り物であった。なぜ近代的な西洋式の大砲が侵略者をいためつけることができず、かえって在来式の大砲がたびたび戦功をたてたのか。それは、在来式の大砲をつかっていたのが犠牲をおそれず、敢然とたたかう愛国的な軍民であったからであり、西洋式の大砲をつかっていたのが帝国主義をおそれ、抵抗する勇気をもたない封建官吏だったからである。

指導員はまた、一九五〇年に万山群島^{ワンサン}を解放した戦闘で、「海上先鋒艇」が木製の小型舟艇

でもって、白兵戦をいとも勇敢な精神を発揮して、敵の鉄製の軍艦を撃沈したときの話をした。こうした戦闘の実例をいくつかあげてから、指導員は、「戦争の勝敗を決定するのは人民であって、一つや二つの新兵器ではない」という毛主席のことばを引用して話をむすんだ。

この「精神の原子爆弾」の授業を聞いて、麦賢得は戦争をやるには主として政治にたより、人の勇敢さと自己犠牲の精神にたよらなければならないという道理をいっそう深く理解した。それらしい、かれは毛主席の著作を活学活用して、毛沢東思想を、自分の戦闘精神をみがき、さまざまな困難にうちかつたための強力な精神的な武器とするよういっそう努力した。また、たえず革命英雄を手本として自分にきびしい要求を課し、烈火の闘争のなかで困難にみちたさまざまな試練をうけるよう努力した。入隊して一年半ほどのあいだに、かれは毛主席の『人民に奉仕する』『愚公、山を移す』などの文章をなん十遍となく学習し、十数篇の学習心得をかきあげた。そして、学んだものはすぐに実践するようにつとめた。平素でも、かれは毛主席の誠心誠意人民に奉仕しなければならないという教えをまもって、「あくまで党と心を一つにし、

党が行けというならどこへでも行く。かならず張思德同志①に学んで、人民の利益のために自分の生涯をささげる」という要求を自分に課していた。かれは畑仕事をするときには先頭に立ってこやしをかつぎ、遠洋航海のときにはすすんでむしあつい調理室にはいつてみんなの食事をつくった。また、村で火事がおこったときには火勢のもっともはげしいところへとびこんでいつて消火にあたり、台風がおそってきたときには病氣をおして救助突撃隊にくわわった。……

戦闘準備の任務についているときにも、かれは毛主席の帝国主義の本性は変わらない、敵が刀をとげば、われわれも刀をとぐという教えをしっかりと頭にきざみつけて、あらゆる機会をつかんで闘志の鍛練にはげみ、「侵犯してくる敵をいつでも消滅する準備をととのえておく」よう自分に要求した。ある演習のさい、かれは病氣で、床にいていたが、機関室のエンジン

① 張思德同志は中共中央直屬警備連隊の戦士。一九三三年に革命に参加し、長征にくわわって、負傷したこともある。かれは人民の利益のために奉仕した忠実な共產黨員であった。

一九四四年九月五日、陝西省北部の安塞県の山中で炭を焼いている最中に、炭焼きがまがくずれたため、犠牲になった。

の音を聞くと、すぐに起きあがって機関室へかけつけ、自分の持ち場についた。分隊長が休むようすすめると、かれは、「演習場は戦場であり、演習は戦闘です。砲声を聞いてだまって寝ておれる戦士はいません」と答えた。

かれは新兵だったので複雑な訓練課目は本来まだうけられないのに、古参兵とおなじように夜間訓練をやらせてほしいとつよく要求した。かれは、「戦争は今夜にもおこるかもしれない。戦争がおれば死傷者がでるので、新しい同志も古い同志に代わってやれなければなりません。情勢がそれを要求しているのです」といった。上級は、かれがあたえられた訓練課目をりっぱにやりとげているのを知って、その要求をかなえた。そして、麦賢得は暗闇のなかで機械操作の練習をかさね、ついに夜間でも自由に操作できる腕を身につけた。

海上作戦がどのような苦労にもたえられる高度の能力を必要とすることを知らず、かれは遠洋航海のとき、わざわざ震動がはげしく、温度が高く、狭苦しい機関室にもぐりこんで作業をし、自分を鍛えていった。このようなことは一回や二回でなく、ほとんど毎回つづけられた。

連続作戦の思想作風を身につけることの重要性を知ると、かれは任務をやりとげて帰港してからも、つぎの出航の準備のために、真夜中であらうと、あらしの日であらうと、またどんな

に疲れていようと、かならず機械の点検やガソリン、水の補給をやり終えて、やっと休息をとるのだった。こうしたことも、ただ一日や二日でなく、ほとんど毎日のようにやられた。

また、戦闘の勝利をおさめるには一分一秒がひじょうに大切であることを知らず、かれはどんな小さなことでも一分一秒をきりつめてやった。甲板から機関室にもできるだけ迅速にはいるように、いつも階段の手すりをすべりおりた。これにかぎらず、かれはどんなことでも一分一秒を大切にしようつとめた。

この「毎回」、「毎日」、「どんなことでも」ということが持続的にやられるまでには、はかりしれない努力がはらわれた。こうした鍛練を堅持するのは苦しいことであったが、それは麦賢得の革命的な気骨をつくるうえでひじょうに大きな役割をはたしたのである。

麦賢得はこのような烈火の革命闘争のなかで、毛主席の階級闘争の思想で自分の頭脳を武装し、アメリカ帝国主義とすべての階級敵にたいする憎しみを深め、プロレタリア世界革命の理想を高くかかげ、自覚的に自分の欠点とたたかい、客観的な困難とたたかい、はげしい風波とたたかい、革命闘争の前進をはばむすべての「敵」とたたかってきたのである。たたかえばたかかうほどかれの闘志は高まり、意志は強まり、思想は革命化し、技術も上達した。こうし

て、敢然とすべての敵を圧倒する英雄的な品性を一步一步みがきあげていった。かれはすべての敵を圧倒する英雄的な行動で、「人民の利益のためには自分を犠牲にすることをおそれない」という誓いを実践し、「赤い心のすべてをかけたむけ」で人民のためにつくすという高さに到達したのである。

「毛主席のりっぱな戦士になるように努力しよう！」

麦賢得が負傷してから、われわれの偉大な指導者毛主席と林彪副主席は、かれにひじょうな関心をよせ、党と人民はかれに最高の榮譽をあたえた。入院中、かれをたずねてくる人びとはとだえることなく、慰問の手紙や慰問品が毎日のようにとどけられた。称賛と表彰の声、「麦賢得に学ぼう」というスローガンがたえずかれの耳にきこえてきた。

若い戦士の麦賢得にとって、これは新たなきびしい試練であった。

あるとき、麦賢得は招かれて、ある集会に出席した。行くまえに、医者から、今日の心がまえはどうかと聞かれて、そのころ、かれの傷は好転をみせはじめていたものの、まだ話をするにはひどく骨が折れ、ひとことずつ区切って「大会に学びたい。日ごとに向上し、毛主席のり

っぱな戦士になろう」と答え、さらに、「毛主席のりっぱな戦士になろう」ということばを大会へささげようと考えて、紙に書いた。しかし、ある同志から、このことばのまえに「永遠」の二字をくわえたらどうかといわれて、かれはそのとおりにしたが、しばらく考えてから、ふたたび筆をとり、「永遠」の二字を「努力」と書きかえた。

毛主席のりっぱな戦士になるように努力する、これこそ麦賢得同志の榮譽と自己に対処する根本的な態度である。

毛主席は、「われわれは、謙虚で、慎重で、おごりをいましめ、あせりをいましめ、誠心誠意、中国人民に奉仕すべきである……」と教えている。麦賢得はどの病室に移っても、この語録を持っていた。毛主席のこの教えを、自分の座右銘としていたのである。

話が榮譽や功績のことにおよぶと、かれはいつも榮譽と功績を偉大な指導者毛主席に帰し、党と人民に帰し、集団に帰した。

大会で称賛をうけるたびに、いつも手をあげて声高らかに「毛主席万歳！」とさげんだ。

自分の業績を宣伝する映画や幻灯を見ると、いつもはさしそくに頭をたれている。

ラジオで自分をたたえる文章や歌を聞くと、いつもこっそりとはなれて行ってしまふ。

麦賢得はまだたぐさんのことばを使って自分の考えをあらわすことができない。かれがいつもよくいうことばは、「よせ、よせ」と「まだまだです」である。

自分のことをいわれるたびに、いつもあわてて「よせ、よせ」と手をふる。人からもらった慰問のたまごを二かご邢台地震の罹災者におくったことがあるが、看護婦がそれにかれの名前を書き加えたのをみつけると、すぐに筆で消して、腹立たしそうに「よせ、よせ」といったものである。またあるとき、同志の一人が、かれをたたえる会ひまわりは太陽にむかうという歌をうたうのを聞くと、かれはいらだたしそうに「よせ、よせ」と何度もいった。

表彰されたり称賛されたりすると、かれはいつもはずかしそうにしかも心底から「まだまだです」というのである。「八・六」海戦で、かれは頭部に重傷を負い、脳脊髄液が流れてもお戦いつづけたのは、文字どおり「肝や脳がとび散って泥まみれになる」まで人民のためにくした、ということが出来る。だが、人びとが、このことを話したり、かれに学ぼうといったりすると、いつもいても立ってもいられないみたいに「まだまだです」というのである。

麦賢得の考えでは、自分のためにはすこしどころか、これっぽちもやってはならない。公のためには永遠にまだまだであり、一生かかってもまだまだなのである。

「よせ」と「まだ」という簡単なことばは、麦賢得の、徹底的に私心とたたかい、ひたすら公のためにつくすという崇高な品質と共產主義の精神的境地を十分にしめしているのである。

入院中、麦賢得は重傷患者でありながら、自分が病人であることをいつも忘れていた。かれは病院を人民に奉仕する新しい戦場とみなし、同志にたいし、集団にたいして極度の熱誠をあらわした。

やっとひとりで動けるようになったばかりで、まだ手足がひどく不自由なのに、かれはいつもびつこをひきながら看護婦の仕事を助けて、ガーゼをたたんだり、ドアや窓やテーブルや椅子をふいたり、痰つぼを洗ったり、なんでもやった。重傷患者が便所へ行こうとするのを見ると、いそいで手をかしてやり、やっと動かせる左手でこれらの同志のかわりに、バンドをといでやったり、結んでやったりした。また、半身不随の患者が身動きできないのを見ると、すぐこれらの同志にふとんをかけてやったり、寝返りをさせてやったりした。

身体の調子がいくらかよくなると、自分からすすんで仕事を要求した。かれと二人の同志に娯楽室と文芸・体育用具管理をまかせたところ、かれは毎日娯楽室をきれいに掃除し、きちんと整理した。ある晩、文芸娯楽用具を点検したら、将棋が一組たりないではないか。かれはす

ぐに病院の上から下まで病室という病室をかけまわり、とうとうさがし出して、やっと床にいた。

脳神経にひどい傷をうけていたので、記憶のはっきりしないことが多くて、たったいま食事を終わったばかりなのに、なにをたべたか忘れていることもよくあった。しかし、集団の利益を守ることにについては、なんと注意深く、なんと心を使っていたことか。手足が不自由なのに、椅子を運ぶときなど、いつもそっと持ちあげ、そっとおろした。もし誰かが手荒くおいたりとすると、「よくないな」というのである。

あるとき、かれが便所へいって、なかなかもどってこないことがあった。看護婦がいつてみると、かれは首をかたむけてじっと何かに耳をすましていた。看護婦も耳をすますと、ポタポタと水のしたたり落ちる音が聞こえた。かれは水道の蛇口をのこらずしらべ、汗まみれになりながら、なおも休もうとしない。やっと二階の下水管の音であることをつきとめて、ほっとした顔でもどっていった。

入院中、麦賢得は療養者でもあり、看護人でもあり、ひじょうに責任感の強い管理係でもあり、士気旺盛な戦闘員でもあり、毛沢東思想に限りなく忠誠な宣伝員でもあった。かれはど

こでも公のためにやり、なにごと公のためにやり、すこしも利己的でなく、ひたすら人にくした。人びとは「麦賢得同志から生きた『老三篇』を学ぶことができる」とかれを称賛した。

ところが麦賢得同志はやはり、「まだまだです」と答えるのである。かれは「個人よりも党と大衆に、自分よりも他人に、いっそう関心をよせなければならない」という毛主席の教えを暗誦するのが、いちばん好きである。そして、いつもこの教えで、自分を上げまし、自分を点検しており、完全に徹底的に人民に奉仕する精神で、自分にきびしく要求しているのである。

毛主席が「私心とたたかい、修正主義を批判しなければならない」という偉大な指示を出してから、麦賢得同志はもつとも積極的これにこたえ、もつとも断固として実行に移している。かれは「思想上の敵にたいしては、アメリカの鬼どもにたいするのとおなじように、いっつをダダダッと撃ち殺せ！」といっている。そして、かれは毛主席の最新指示にしたがって、いっそう自覚的に、いっそうきびしく自分に要求し、徹底的に私心とたたかい、ひたすら公のためにつくして、思想の革命化の道を邁進しようと決心している。

麦賢得同志はもつとも断固として、もつとも忠実に、林彪副主席の「毛主席の著作を読み、

ぐに病院の上から下まで病室という病室をかけまわり、とうとうさがし出して、やっと床にいた。

脳神経にひどい傷をうけていたので、記憶のはっきりしないことが多くて、たったいま食事を終わったばかりなのに、なにをたべたか忘れていることもよくあった。しかし、集団の利益を守ることにについては、なんと注意深く、なんと心を使っていたことか。手足が不自由なのに、椅子を運ぶときなど、いつもそっと持ちあげ、そっとおろした。もし誰かが手荒くおいたりとすると、「よくないな！」というのである。

あるとき、かれが便所へいって、なかなかもどってこないことがあった。看護婦がいつてみると、かれは首をかたむけてじっと何かに耳をすましていた。看護婦も耳をすますと、ポタポタと水のしたたり落ちる音が聞こえた。かれは水道の蛇口をのこらずしらべ、汗まみれになりながら、なおも休もうとしない。やっと二階の下水管の音であることをつきとめて、ほっとした顔でもどっていった。

入院中、麦賢得は療養者でもあり、看護人でもあり、ひじょうに責任感の強い管理係でもあり、士気旺盛な戦闘員でもあり、毛沢東思想に限りなく忠誠な宣伝員でもあった。かれはど

こでも公のためにやり、なにごと公のためにやり、すこしも利己的でなく、ひたすら人にくした。人びとは「麦賢得同志から生きた『老三篇』を学ぶことができる」とかれを称賛した。

ところが麦賢得同志はやはり、「まだまだです」と答えるのである。かれは「個人よりも党と大衆に、自分よりも他人に、いっそう関心をよせなければならぬ」という毛主席の教えを暗誦するのが、いちばん好きである。そして、いつもこの教えで、自分を上げまし、自分を点検しており、完全に徹底的に人民に奉仕する精神で、自分にきびしく要求しているのである。

毛主席が「私心とたたかい、修正主義を批判しなければならない」という偉大な指示を出してから、麦賢得同志はもっとも積極的のこれにこたえ、もっとも断固として実行に移している。かれは「思想上の敵にたいしては、アメリカの鬼どもにたいするのとおなじように、いっつをダダダッと撃ち殺せ！」といっている。そして、かれは毛主席の最新指示にしたがって、いっそう自覚的に、いっそうきびしく自分に要求し、徹底的に私心とたたかい、ひたすら公のためにつくして、思想の革命化の道を邁進しようと決心している。

麦賢得同志はもっとも断固として、もっとも忠実に、林彪副主席の「毛主席の著作を読み、



劉 英 俊

毛主席の教えにしたがい、毛主席の指示どおりに仕事をし、毛主席のりっぱな戦士になろう」というよびかけにこたえており、毛沢東思想の輝かしい光を放ちつつ、共産主義の新しい世代の新しい精神的様相をはっきりとあらわしているのである。



劉英俊が身を犠牲にして守った六名の子供たち

人民のすぐれた息子——劉英俊

黒竜江省の佳木斯市に駐屯する中国人民解放軍某部隊砲兵中隊の戦士劉英俊は、一九六六年三月十五日、人民の生命の安全を守って英雄的な死をとげた。

毛主席は二十数年まえにこういつている。

「革命の前衛となる人を大勢養成しなければならない。それは、政治的見通しをもった人たちである。それは、闘争精神と犠牲的精神にあふれた人たちである。それは、気持ちが淡泊で、忠実で、積極的で、実直な人たちである。それは、私利をはからず、ひたすら民族と社会の解放のためにつくす人たちである。それは、困難を恐れず、困難をまえにしてつねに確固としており、勇敢に前進する人たちである。それは、傲慢な人間でもなければ、売名主義者でもなく、足の地についた、実際の精神にとむ人たちである。中国にこのような前衛分子が大勢いれば、中国革命の任務は順調に達成されるであらう。」

劉英俊は毛主席が望んでいたとおりの人間であり、偉大な毛沢東思想によつてはぐくまれた偉大な共産主義の戦士であった。

毛主席を限りなく熱愛する

劉英俊は吉林省長春市郊外の貧農の家に生まれた。かれは小さいときから、ふるい社会の苦しみや新しい社会の幸福を父母から聞かされ、過去のことを忘れないように教育されてきた。かれのおじさんが国民党反動派に殺された話を聞くと、かれは怒りに小さな目を丸くし、こぶしをふりあげていった。「大きくなったら解放軍になって、きっとおじさんの仇をうってやる」あるとき、母につれられて、解放まえに一家が住んでいたことのあるレンガ焼きのかまにいったことがあった。

「母さん、こんなところにきて何をするの？」

とかれは母にたずねた。

「英俊！ 解放まえ、わたしたちはここに住んでいたのだよ！」

劉英俊はふしぎそうに、「こんな腰ものばせないところに、どうして人が住めたの？」と聞

いた。

母は悲しみに顔をくもらせ、「母さんはここでおまえを生んだのだよ！ あのころ、母さんはおまえの父さんとよその村から逃げてきたのだけど、住むところがなくてね、しかたなしにこのこわれたかまのなかに住んだのだよ。おまえを生んだとき、母さんは三日間なんにもたべていなかった。お湯すら飲めなかった。もしも、党と毛主席がわたしたちを火の海のなかから救ってくださらなかったら、わたしたちはいまごろどうなっていたことか……」

劉英俊は母の話を聞いて強く心をうたれた。かれの胸は、旧社会を憎み、新社会を愛し、偉大な指導者毛主席をいっそう愛する気持ちでいっぱいだった。

一九六二年六月、蒋介石匪賊一味がアメリカ帝国主義の支持の下に、大陸反攻をくわだてているとき、劉英俊はなんども申請して、中国人民解放軍に入隊した。このとき、やっと十七歳になったばかりであった。

部隊というこの毛沢東思想の大きな学校で、劉英俊は毛主席の著作を活学活用するなかで、

毛主席の英明さと偉大さをますます深く知った。かれはいった。

「ぼくは小さいときよく空には北斗星、地上には毛沢東」という歌をうたった。だが、ほ

んとうにこの歌の意味がわかったのはこの数年だ」

かれは夜空にかがやく北斗星を指さしながら熱情をこめてうたった。

「毛主席は中国人民の『北斗星』、毛主席は世界人民の『北斗星』」

かれは毛主席の写真を部屋の四方の壁にかけ、毎日、そのまえに立って、慈愛と親しみにあふれた毛主席の姿をじっとながめた。部隊が移動するとき、かれが最初にやることは、毛主席の写真をはずして、紙につつむことであつた。そして、新しい駐屯地に着くと、まず壁のほこりをはらって、毛主席の写真をきちんとかけるのだった。

一九六六年の春節に、劉英俊は休暇をもらって郷里に帰った。発つとき、かれは分隊長の李洪記に、

「分隊長、分隊が移動するようなことがあつたら、毛主席の写真をかならず持つていってください。そして、新しい駐屯地に着いたら、まず毛主席の写真をかけて、同志たちが毎日見れるようにしてください」とたのんだ。

分隊長がほかに何かないかとたずねると、

「ありません。ぼくが心配しているのはそれだけです！」といった。

劉英俊——この貧農の息子は、われわれの敬愛する指導者毛主席にたいして、このように深いプロレタリア階級の感情をいだいていた。それは、わが国の広範な勤労人民の共通した感情でもあつた。

すすんで世界観を改造する

劉英俊が入隊したのは、ちょうど中国人民解放軍で、中央軍事委員会と林彪同志のすぐれた指導の下に、毛沢東思想の偉大な赤旗を高くかかげて、毛主席の著作を活学活用する大衆運動がはじめられてから二年近くたつているときであつた。劉英俊は、すぐに林彪同志の「毛主席の著作を読み、毛主席の教えにしたがい、毛主席の指示どおりに仕事をし、毛主席のりっぱな戦士になろう」というよびかけに熱烈にこたえた。毛主席の「雷鋒同志に学ぼう」①という

① 雷鋒は中国人民解放軍瀋陽部隊某輸送中隊の分隊長。かれは毛主席の著作を積極的に学ぶことによって、高い政治的自覚、ゆるぎないプロレタリア階級の立場、心から人民に奉仕する貴い品性をそなえた戦士となり、三度功を立てて表彰され、模範共青团員にえらばれた。一九六〇年十一月中国共産党に入党。一九六二年八月、公務中に殉職。毛主席はみずから筆をとって「雷鋒同志に学ぼう」という題辭を書いた。

偉大なよびかけがあつてから、かれは、進歩し、革命をやり、人民に奉仕するためには、雷鋒のように、毛沢東思想をほんとうに自分のものにしなければならぬことをいつそうはつきりと知った。かれは「雷鋒同志に学ぼう」という毛主席の題辭をノートに記し、壁に書いて、自分を鞭うった。かれは毛主席の著作をまじめにこつこつと、むさばるように学び、どこへゆくにも毛主席の著作を肌身からはなさなかった。ときには、深夜歩哨からもどつてからも毛主席語録を暗誦した。

部隊が農場へ大豆の取り入れにいったときのことだった。かれは誰よりも多くかつぎ、誰よりも早く運んだので汗で体じゅうがぐっしりになった。だが休けいになると、毛主席の著作をとり出して学習をはじめた。かれが疲れているのを見て、ほかのものが休むようにしきりにすすめたが、かれは、「疲れているからこそ、毛主席の著作のなから力を汲みとらなければならぬんだよ!」といった。

劉英俊は毛主席の著作を学習するなかで、毛主席の著作が「階級闘争をおしすすめるための本であり、革命をやるための本である」ことを深く知った。かれは、「毛沢東思想はほくに前進の道を指ししめてくれた」といって、熱情をこめて詩をつくった。

毛主席の著作は太陽のようだ

一字一句が金色にかがやき

戦士の心を明るく照らし

仕事、学習の方向を指し示す

かれは毛主席の階級と階級闘争の学説をとくに重視して学習し、はつきりとした階級と階級闘争の観点をうち立てた。「毛主席の著作を読んで、われわれの敵はだれか、われわれの友はだれかという革命のいちばん重要な問題を理解することができた。また、階級闘争、プロレタリア革命、プロレタリア階級独裁、共産主義……が何であるかを知った」とかれは日記に書いている。

かれはつねに内外の階級闘争、革命事業の必要から学習した。そして、学習するなかで、世界観の改造に力をいれ、たえず自分にたいする革命をおこなった。

かれは自分にたいしてひじょうにきびしく要求し、少しでも欠点を見つけると、卒直にそれをもとめて、すすんで検討し、断固として改めた。一九六五年の冬のある夜、歩哨に立っていたとき、不注意から銃を暴発させてしまった。副指導員の李知芳が点検にくると、かれはすぐ

にすすんでこのことを報告して、自分を処分してくれるように要求した。李知芳は、「この問題は、指導側で研究してからにしよう」といった。

あくる日の朝、「重大事故の芽ばえ」という大きな見出しの劉英俊の文章が廊下の黒板報に出された。内容は自分の暴発事故についての検討で、みんなに警戒心を高めるよう希望していた。このあと、かれは中隊にも検討書を出した。書き終えた時間は、「一九六五年十二月五日午前三時二十七分」としてあった。これを見て副指導員は、「劉英俊はたまたま犯した誤りを徹夜で検査している。これはひじょうにりっぱな自己批判の精神だ」と強い感動をうけた。

劉英俊は誤りを犯したとき、深くつつこんで自分を検討するだけでなく、さらにりっぱな点は、よいことをやったあとも、毛主席の教えにもとづいていっそう高く自分に要求することであった。一九六三年の冬、雪まじりの風が強く吹きつける夜、歩哨からもどってきた劉英俊は自発的に、ベニヤ板で馬小屋の破れた窓をふさいだ。このときすでに一時をすぎており、疲れてもいたので、もう寝なければならなかったが、かれは机にむかつて『ベチュンを記念する』をひらいた。点検から帰ってきた分隊長の熊志毅がなぜまだ寝ないのかとたずねた。劉英俊は、「窓が破れていることを前から知っていたいながら、どうしていままでほうっておいたの

か、その原因をさがしているのです」といった。

「なおしたのだからもういいじゃないか？」

劉英俊は首をふった。「だめなんです。毛主席は、『ベチュン同志の少しも利己的でない、ひたすら他人につくす精神は、かれの仕事にたいする極度の責任感にあらわれている』とっています。だがぼくは、この極度の責任感に欠けていたのです」

劉英俊は実践ということを重視して毛主席の著作の学習ととりくんだ。かれは、革命のために学び、革命のために運用する態度を堅持し、理論と実践、主観的世界の改造と客観的世界の改造とをしっかりと結びつけた。

一九六四年の春、中隊がある地方で警戒の任務にあたったときのことだった。そのとき、二つの分隊が一つの部屋で生活することになり、たいへん窮屈だった。そこで、上級はとなりの部屋を修理して使うことに決めた。その部屋というのはいぜん炊事場だったところで、壁はすすでまっ黒になり、ごみが山のようになっていた。同志たちのなかに、いったいこの部屋が使えるようになるのかどうか心配するものもでき、劉英俊もはじめは、「ひどいなあ！」といった。しかし、すぐにこの考えが、困難にぶつかったときどうすべきかについての毛主席の教

えにあつていないことに気づき、副分隊長のところへいつて自己批判をした。そして、みんなを上げますために、毛主席の『愚公、山を移す』を全分隊で学習するよう提案した。

部屋の修理がはじまると、劉英俊は誰よりもがんばった。よごれる作業や疲れる作業をかれはすすんで引きうけた。かれの手は壁をぬる石灰水で水ぶくれになった。緊張した作業が一段落すると、きたなかった部屋はいっぺんにみちがえるようになった。

「魚は水に、瓜はつるにたより、革命戦士の成長は偉大な毛沢東思想にたよる」劉英俊は毛主席の著作を学び、実践の試練をうけるなかで、一步一步プロレタリア階級の世界観をうち立てていった。かれは日記にこう書いている。

「真の共産主義者は、小さな『私』の束縛からぬけ出た人で、かれらの心のなかには革命の利益、集団の利益しかない。かれらは、革命にとって、集団にとって利益になることは積極的に行き、名譽や地位ということは少しも考えず、他人がなんといおうと気にとめない。かれらは人類のうちでもっとも高尚な人であり、ベチューンがこのような人であった。……ぼくはかならずベチューンを手本に……永遠に革命の先鋒隊員となる」

「革命をやるには闘争をしなければならず、闘争をおそれては、革命はやれない。われわれプロレタリア革命家は、すべてを共産主義の革命事業にささげているのであり、革命闘争に参加することよりほかに、もっと幸福なことがあるだろうか？」

「革命のために生き、革命のために死ぬ。すべてを革命のために、革命をすべてのうえにおく」

かれはまたこういつている。「人民の利益のために死ぬのは、泰山よりも重く、人民の利益のために生きるのも、泰山より重い」

劉英俊は中国革命と世界革命を胸にいだいていた。毛主席が各国人民の反帝革命闘争を支持する声明を発表するたびに、かれは積極的にそれにこたえ、自分の態度をはっきりと表明した。あるとき、町へ買い物にゆき、新聞に毛主席のアメリカの侵略に反対するコンゴ（レ）人民を支持する声明が発表されているのを見た。かれは、さっそく新聞を買って中隊へもどり、全分隊の同志たちの学習を組織した。その夜、かれは「毛主席の声明は全世界を照らす」という題で、はげしい感情をこめて詩を書き、祖国の命令がありしだいたちに出征し、コンゴ（レ）人民とともに侵略者を消滅することを誓った。また、アメリカ帝国主義がベトナム侵略戦争を拡大したとき、かれはすぐに申請書を書いて、ベトナム人民の抗米闘争に参加させてく

れるよう要求した。

まごころをこめて人民につくす

毛主席は、「すこしばかりよい事をするのはさして難しいことではない。難しいのは一生涯悪い事をせず、よい事をし、一貫して広範な大衆の役に立ち、一貫して青年の役に立ち、一貫して革命の役に立ち、数十年一日のように刻苦奮闘することである。これこそ、なによりもちばん難しいことである！」といっている。

劉英俊は毛主席のこの教えをかくと守った。かれは人民に奉仕する大きな志と集団の利益、人民の利益になることをこつこつとやることをしっかりと結びつけ、祝日、休日になると、心から大衆のために奉仕した。

寒い冬の日のこと、営舎の近くにある民家の井戸のまわりに厚い氷がはって、まるで小さな「氷山」のようになり、水を汲むのにとでも不便だった。日曜日の朝にまたまここを通りかかった劉英俊は、さっそく近所からツルハシとクワを借りてきて、綿入れをぬぎ水をうちくだいた。力いっぱいツルハシをふりおろすので、水滴もすぐに凍ってしまいうほど寒い天気なのに、

かれの白い下着は汗ですっかりぬれてしまった。

「もういいですよ。ひと休みしてください！」老婆がやってきて感謝しながらかれにいった。

だがかれは、「おばあさん、だいじょうぶですよ」といってやめようとせず、十一時すぎになつてやっと営舎にもどつていった。その後も、かれは休息の時間を利用してはやってきて、「氷山」をくだけ、井戸のまわりをきれいにならした。

雪まじりの強い風の吹くある日のことだった。営舎の近くに住む王文琴が会合から帰つてくると二人の子どもが家にいなかった。かの女はすっかり気が動転してしまった。息子の啓敏はまだ四つたらず、九つになる娘の艶軍は小児麻疹でよく歩けない。道にまよつて雪にうまつてしまうようなことがあったらどうしよう。かの女が気をもんでいると、突然戸がパタンと開いて、全身雪まみれになった劉英俊が啓敏をかかえ、艶軍の手をひいて入ってきた。かれは子どもをおろすと、「おばさん、この子たちが道で凍えて動けなくなっていました。車が多くてあぶないので、つれてきたんです」といった。

王文琴はこれを聞いてなんと感謝してよいかわからなかった。かの女は休んでいってくれる

ようになんでもすすめた。だが、劉英俊は「これからまだ学習会に出ないといけないんです」といってとぶようにかけていった。

劉英俊はいつも人びとのために少しでもよいことをしようと考えていた。雷鋒のように人の手助けをできることがかれにとっていちばんの幸福だった。

ある日、劉英俊は中隊本部から駐屯地にもどる途中、にわか雨にあい、全身ずぶぬれになってしまった。このとき前方に瓜を山積みにした牛車が一台、川にはまりこんでいるのが目にとまった。御者の老人がひっきりなしに声をかけているが、牛は動けないでいる。雨はますます大降りになって、川の水はみなぎり、車につんだ瓜がいまにもおし流されそうになっている。劉英俊はいそいでかけより、川にはいつて車をおした。だが、車は重すぎてびくともしない。そこで、かれは老人と車の瓜をおろして牛を川からひきあげた。

一時間あまりすぎたが、強い雨はあいかわらず降りつづいていた。劉英俊はすっかり体がこごえてガタガタふるえたが、老人に手を借して、おろした瓜をもういちど車につみこんだ。老人は感動してなんどもなんども礼をいった。劉英俊は「お礼なんかいいんですよ。毛主席がぼくを雷鋒に学ばせているのですから」といった。

かれは中隊のなかでもよいことをたくさんやっていた。毛主席の語録板や書棚をつくったり、窓や机、椅子を修理したり、郵便箱をこしらえたり、バスケットの網をあんだり、スローガンを書いたり……中隊にとって役に立つことは、いつも何もいわずに黙々とやった。かれの戦友たちはこういつている。「劉英俊のやったことを挙げようとしても、とても挙げきれない」

劉英俊のやったことには、二つのはっきりとした特徴があった。

第一に、そこには明確な階級観点があった。

かれは貧農・下層中農にたいして深い階級感情をもっていた。野営に出るたびに、新しい駐屯地に着くとまず社会調査をやり、どこの家が貧農・下層中農なのか、どの家が烈士の遺族、軍人家族なのかをくわしく調べて、食糧、水、石炭はこびなどいろいろと手伝った。あるとき、六十にちかい貧農の老夫婦が二人だけでたいへん不自由しているのを知ると、かれは毎日のように出かけていって水を汲んだり、庭を掃除したりしてやった。かれは、「ぼくは貧農の息子です。ですから、貧農の人が困っていれば手伝うのはあたりまえです」といった。もう冬も間近にせまっていたので、かれは朝晩の余暇を利用してこの老夫婦のために野菜をたくわえ

る穴を掘ってやった。中隊がここをはなれるとき、老婆は涙を流して中隊長にいった。「この子はわしら貧農・下層中農にほんとうによくしてくれました！」

第二に、これほどよいことをやっていながら、自分の名前を出したこともなければ上級や戦友に話したこともなかった。また、日記にも書かず、自分というものを少しも誇らなかつた。

かれはいつも営舎の近くに住んでいる大衆のためによいことをやってきた。ときがたてばたつほどそれが多くなり、大衆もますますかれに好意をよせ、部隊へ感謝の手紙をとどけようとした。だが、誰一人としてかれのほんとうの名前を知るものはなかった。

ある日、林翠蘭という婦人が、「あなたはわたしたちにこんなにたくさんよいことをしてくれているのに、わたしたちはまだあなたの名前を知りません。何という名前なのですか？」とかれにたずねた。劉英俊はちょっとためらってから、「ぼくは王です。王同志と呼んでください」といった。婦人がまた、「あなたたちの部隊はどこなんですか？」とたずねた。

「となりですよ」劉英俊はそういうなり笑いながら走っていった。

劉英俊が犠牲になって、かれの遺影を見たときはじめて、みんなはかれが劉英俊であることを知った。

かれはひたすら革命のため、人民のためにつくしてきた。そこには、名誉も地位もとめず心から人民に奉仕するプロレタリア革命戦士の気高い品性があらわれていた。

あくまで政治を先行させる

毛主席は、政治は統帥者であり、魂である、政治工作はわが軍の生命線である、と教えている。劉英俊は毛主席のこの指示を断固として実行した。

一九六四年、劉英俊は砲兵の集団訓練隊へ学習のために派遣された。この訓練に参加した同志たちはほとんどが砲兵中隊の正、副分隊長で、軍事技術もかなりすぐれていたが、馬係から砲手になってまだ間がない劉英俊には学習するうえで多くの困難があった。しかし、かれは政治が技術を統帥するのであり、困難が多ければ多いほど毛主席の著作を学び、そのなかから困難を克服する力を汲みとらなければならないと考え、訓練の課目がどんなに多く、忙しくなるうと、毎日かかさず毛主席の著作を学習した。

ある日の午後、劉英俊はかれといっしょにきたある分隊長と「一対一で助けあい、ともに赤くなる」活動の計画をたてた。このとき、日曜日をどう過ごすかで二人の意見がくいちがっ

た。その同志は、劉英俊は軍事の基礎がまだ弱いので、日曜日を軍事課目の復習にあてるべきだと考えていた。

劉英俊は、日曜日は毛主席の著作をいつもより多く学び、大衆工作をやるべきだと考えていた。かれは、「毛主席の著作を活学活用することがいちばん大切な課目です。毛主席の著作の学習を第一におき、頭のなかに毛沢東思想をきざみつけておきさえすれば、軍事技術もりっぱに学びとることができます」といった。

劉英俊はあくまでこれをやりぬいた。これは、かれが政治を先行させることにひじょうに高い自覚をもっていたことを示している。訓練が終わったとき、かれの思想は大いに高まり、軍事技術もすばらしい成績をおさめた。

劉英俊は中隊の政治・思想建設に関心をほらい、たえず上級に意見を出すとともに、自分もすすんで政治・思想工作にあたった。

ある土曜日の夕方、小隊長の李昌万から「明日の日曜日は休息」という伝達があったあと、みんなはそれぞれ自分の予定を話しあっていた。このとき急に、明日の午前中にナスの苗の植えつけを終えるようにという電話が中隊本部からはいった。李昌万はどうやって戦士たちを動

員し、この緊急任務をやりとげようかと考えた。このとき、劉英俊がまるで小隊長の心のなかをみぬいたように前にすすみでて、確固とした口調で、「中隊から与えられた任務はかならずやりとげます」といって、毛主席の『軍隊の生産自給、あわせて整風、生産の二大運動の重要性について』という文章を学習するよう提案し「小隊長、この文章に書いてあることをみんなに話し、軍隊の生産の意義について説明してください。みんなの認識が高まれば、りっぱにこの任務をやりとげることができると思います」といった。

翌日の朝、小隊では労働をはじめる前にこの文章を学習した。全小隊の同志たちはみな中隊のよびかけに熱烈にこたえ、燃えるような熱情をもって、半日かかる仕事をわずか二時間あまりでやりとげてしまった。

劉英俊は中隊の文化革命戦線の尖兵だった。中隊の文化・娯楽活動のなかで、かれは高い自覚をもって、政治を先行させ、文学・芸術を労働兵に奉仕させる方針をつらぬいた。

一九六五年の冬、中隊はそれまで分散して任務を執行していたが、学習のため集中した。これは、文化・娯楽活動をいっそう活発にさせるための条件をつくった。劉英俊は胸をはずませて、中隊本部へいった。

「中隊長、提案があります。もう一度合唱隊をつくってください。そして、中隊長が話をしてください」

「きみの提案はたいへんよいが、いったい何を話すんだね？」

「毛主席の『延安の文学・芸術座談会における講話』の内容をぼくたちに話して聞かせてください。そのあと、自分たちで学べば方向がはっきりすると思いますから……」

毛主席の『延安の文学・芸術座談会における講話』の話になると、劉英俊は息もつかずにしゃべった。「中隊の合唱隊は小さな出し物しかだせません。でも小さな出し物にも大きな方向が必要です。文学・芸術をプロレタリア階級の政治に奉仕させ、政治を先行させ、生きた思想をつかむことに奉仕させるには、毛主席の『講話』のなかでいわれているようにしなければなりません。今年、ぼくたちの中隊は毛主席の著作を活学活用したので、りっぱな人やできごとがとくに多くでしたが、合唱隊のいまの任務は、こうしたりっぱな人やできごとをたたえることだと思っています……」

合唱隊がつくられ、中隊長は劉英俊の提案どおり、みんなに『延安の文学・芸術座談会における講話』の精神を話した。このあと、劉英俊は合唱隊の同志たちとこの文章をくりかえし学

習した。正しい方向が定まったので、かれらの出し物はどれも情勢の教育、階級教育としてかりと結びつけられ、りっぱな人やできごとをたたえたものとなり、出すたびに中隊の幹部や戦士たちから熱烈に歓迎され、人の思想の革命化を大きくうながした。出し物のなかには、劉英俊が自分で創作したり手を入れたりしたものがたくさんあった。

毛沢東思想を宣伝し、毛沢東思想をまもる

毛主席は、「われわれは労働者階級のなかに社会主義と共産主義を宣伝するようつとめなければならない」と教えている。劉英俊は実際の行動でこのよびかけにこたえた。かれは毛沢東思想を、毛沢東思想で武装した英雄や模範的な人びとのことを、機会あるごとに、いろいろな方法で中隊や人民大衆のあいだに宣伝した。

劉英俊はほとぼるような情熱をもって、中隊の同志の毛主席著作の学習を組織し、援助した。「革命はみんなのことなのだ。きみもやらなければならないし、ぼくもやらなければならない。だれかが毛主席の著作を学ばなければ、それだけ革命の力は小さくなる。これはけっして一個人のことではないのだ！」とかれはいつもいっていた。

あるとき、劉英俊は入院したことがあった。そのとき、書店に『毛沢東著作選』がきたことを聞いて、かれは中隊の多くの同志たちが毛主席の著作を買いたがっているのを思い出し、さっそく二十五冊買って中隊に送りとどけた。このようにかれは同志たちに政治的な面から大きな関心をはらっていた。

一九六五年、韓少英という戦士が新兵中隊から砲兵中隊に配属されてきた。その日の夜、劉英俊は韓少英に、「ぼくたちはみな革命の戦士だ。りっぱな戦士になるには毛主席の著作を読み、毛主席の教えにしたがい、毛主席の指示どおりに仕事をするのがいちばん大切なのだ」といって、かれといっしょに『人民に奉仕する』を学習した。韓少英は中隊に九日間いて、後方勤務の機関に転属していったが、この九日間に、二人のあいだにはかたい友情が結ばれ、営舎のなかでも野営に出ても、機会があると、劉英俊は韓少英の毛主席著作の学習をたすけた。出発の日の朝、劉英俊は韓少英を見送りながら、毛主席の著作をよく学習し、いっそうよく人民に奉仕するようくりかえしはげました。

劉英俊は中隊の幻灯係になったことがあった。そのとき、かれは終始、毛沢東思想を宣伝するという一本の赤い線を活動のなかにつらぬいた。かれのつくったスライド（雷鋒）は、雷鋒

同志がいかに毛主席の著作を真剣に学習したかを描いたものだった。かれはスライドをつくるまえに、かならずそれと関係のある毛主席の著作を学習し、まず自分の頭を武装した。どんなに任務が重くても、また、どんなに時間がなくてもそれをつづけた。かれは、教育者はまず教育をうけなければならず、宣伝員はまず宣伝をうけなければならない、毛沢東思想をよく理解してはじめて毛沢東思想をりっぱに宣伝できるのだ、と考えていた。ときには既成品のスライドを使うが、かれはかならず毛主席の語録をえらんで解説に入れるとともに、初めと終わりの部分にも毛主席のことばを引用した。かれは口ぐせのように、同志たちがいつでもどこでも毛主席のことばを聞けるようにしなければならないといった。そして、みんなが適時教育をうけることができるように、夜も昼もなく新しいスライドを画きつづけた。一九六五年、王杰①

① 王杰は中国人民解放軍濟南部隊某機甲部隊工兵一中隊の分隊長で、模範共青团員。かれは毛主席の著作を活学活用して、たゆみなく毛沢東思想で自分を武装し、ひじょうなはやさで、祖国を胸に、目を世界にむける偉大な革命戦士に成長していった。一九六五年七月、民兵訓練にあたっていたとき、爆薬に突然火がついたため、かれは身をすてて十二名の民兵と人民武装部隊の幹部をまもり、英勇的な犠牲をとげた。そのとき二十三歳だった。

の事績が新聞にのると、かれは新聞を手にしながら同志たちに、「王杰同志はぼくたちの時代のもうひとりの雷鋒であり、毛主席のりっぱな戦士だ。ぼくたちは王杰同志に学ばなければならない」と話した。

すでに夜も十二時を過ぎていたが、劉英俊はまだ小さな机にむかって王杰を宣伝するスライドを画いていた。歩哨に立っていた副分隊長の王春明が心配して、「早く寝ろよ。夜が明けたらきみの番だぞ」といった。だが劉英俊は、「明日の晩、この幻灯をやるんです。ですから、どうしても今晚中に画いてしまわないと、明日同志たちに見せられなくなるんです」といった。

こうして、一九六五年三月から一九六六年三月までのあいだに、かれは二十三のスライドを画きあげた。

一九六五年、中隊は六、七カ所に分散して任務にあたっていた。そこで、かれは中隊の同志たちが一人のこらず幻灯を見て教育をうけることができるようにするため、骨身を惜しまず、幻灯機を背負って、一カ所、一カ所まわって歩いた。わずか三人しかいないある小さな班が中隊から二十華里ほどはなれたところに駐屯していたが、そこにも出かけていった。かれは「わ

れわれは毛沢東思想を宣伝するのだ。ひとりでも多く見てくれれば、それだけ多くの人が毛沢東思想の教育をうけることになるんだ」といった。

劉英俊は、みんなが毛沢東思想にもとづいて事がはこべるようにするため、毛主席の語録板を二枚つくって壁にかけた。そして数日おきに新しい語録ととりかえた。新しい戦士が配属されてきてもあまり気をくばってやらない古参の戦士のいることに気づくと、劉英俊はさっそく語録板にきちよう面な字で、「われわれは、共通の革命の目標をめざして、全国の津々浦々から集まってきたのである。……革命部隊のすべての人は、たがいに心をくばりあい、たがいにいたわりあい、たがいに助けあわなければならない」と書いた。

夜、かれはさらにこの語録を全分隊の同志たちに読んできた。戦士の王家好は、ときどき新しい同志にたいしてよくない態度をとっていたが、この語録を見て、「もしこの語録を読んでいなかったら、自分はまだこれでよいと思っていただろう！ 毛主席のことにばに照らしてみても、やっと自分が毛主席の教えどおりにやっていないことに気がついた」といって、自分からすすんで新しい同志と心をうちあけて話をした。また、全分隊の同志たちも、いっそう政治的にたがいに助けあい、生活面でたがいに心をくばりあうようになった。

一九六五年いろいろ、劉英俊は毛主席の階級闘争、人民に奉仕する、人民戦争、批判と自己批判、刻苦奮闘、団結などにかんする語録百あまりを書き、そのつど分隊の思想問題を解決し、みんなの思想の革命化を大いにうながした。

劉英俊は手紙のやりとりも、毛沢東思想を宣伝する大切な方法だと考え、手紙をうけとった人がまっさきに毛主席の教えを目にすることができるよう、いつも、封筒のうえに毛主席の語録を書いた。そして、同志や友人たちに手紙を書くたびに、毛主席の著作を、「問題をもって学び、活学活用し、学習と運用を結びつけ、さしせまって必要なものからさきに学んで、たちどころに効果があらわれるようにせよ」という林彪同志の指示にもとづいてまじめに学習するように希望した。

劉英俊に田瑞蓮という病気で休学して家にいる同級生がいた。一九六六年の春節に休暇をとって郷里に帰ったとき、劉英俊はかの女とあった。そのとき、かの女は都会にいて仕事をしたいともらした。劉英俊は、「工業戦線でも人が必要だが、農業戦線でもっと人が必要なんだ。ぼくは祖国がいちばん必要としているところにゆくべきだと思う！ 農業はきついが、ぼくたち青年は重い荷物をかつぐべきだよ」と忠告した。田瑞蓮はこれを聞いてかならず祖国の

必要にこたえたとかれに誓った。

部隊に帰ってから、劉英俊は二度手紙を書いて田瑞蓮が農業にうちこむようはげました。

三月十二日、犠牲になる三日まえに、劉英俊はもう一度手紙を書いて、田瑞蓮が農村に根をおろすようにすすめ、「青年が革命的であるかどうかをみるには、なにを基準にするか、なにによってその人をみわけるか。それは、その人が広範な労働大衆と結びつくことをのぞみ、しかも、それを実行するかどうかをみるというたった一つの基準しかない」という毛主席の言葉を引用して、毛主席の著作を読み、毛主席の教えにしたがい、毛主席の指示どおりに仕事をし、党の分配にしたがって、社会主義の新しい農村を建設するようはげました。

田瑞蓮はこの毛沢東思想にみちた手紙をみて、農業戦線で働くことを決意した。そして、劉英俊のように、三人の同級生にも、家庭を説得して、自分といっしょに農村にいて農業生産に参加するようあたにかい援助の手をさしのべた。

劉英俊は子供たちの成長にも大きな関心もち、毛沢東思想で子供たちを教育し、赤い後継者にするよう心がけた。かれは小学校の校外補導員になって、はじめて子供たちに話をしたとき、労働人民が旧社会でどんなに苦しい生活をしていたかを話してきかせた。また、子供たち

といっしょに革命烈士の記念塔にでかけて、今日の幸福な生活はたやすく得られたものではなく、革命烈士の血によって得られたものであることを教え、階級の苦しみを忘れず、今日の幸福をかみしめ、毛主席の著作を読み、毛主席の話を聞き、毛主席の教えにしたがって勉強し、毛主席のりっぱな子供になるよう話した。かれはよくひまな時間を利用して子供たちの思想状況を知らするために学校へ行って子供たちとひざを交えて話をし、家庭訪問をし、子供たちに毛主席の著作を学ばせた。ある日、ひとりの子供が昔の武將の絵を画いているのを見て、劉英俊は、「赤い少年は赤い英雄をかき、毛沢東思想で育てられた英雄をかかなければだめだよ」といつてきかせた。かれはまた革命的英雄を描いた絵物語を十冊ほど買って子供たちにとどけ、「赤い少年は赤い本を読むんだよ」と教えた。

劉英俊は自分の体験をつうじて、革命をやるには毛沢東思想をはなれてはならないことを知り、みんなが毛沢東思想をしっかりとつかんでくれることをひたすら願った。そこで、かれは毛沢東思想の宣伝を自分の一生涯の戦闘的任務としたのだった。

劉英俊は階級闘争のなかで毛沢東思想を活字活用し、勇敢に毛沢東思想をまもった。かれは、しっかりとした立場、するどい感覚をもっており、帝国主義の武力侵略だけでなく、国内

外の階級敵の「平和的転化」の陰謀にも高度の警戒心をもっていた。反党、反社会主義、反毛沢東思想の誤った理論にたいして、かれははげしいいきどおりを覚え、それをみやぶると、ただちに反撃を加え、断固として毛沢東思想をまもるためにたたかい、一九六四年らしい、悪質な映画や書籍にきびしい批判をおこなってきた。

人民の生命をまもって英雄的な死をとげる

劉英俊は日記に、「人の生命はただ一つだが、祖国はその生命より貴いのである。ひたすら祖国のため、人民のため、真理のためにつくせるならば、自分の生命、自分の青春をささげても、それをほこりに思い、光栄に思い、幸福に思う」と書いている。劉英俊はいったことはかならず実行した。人民が必要とすれば、少しもためらうことなく、自分の貴い生命をささげたのである。

一九六六年三月十五日、佳木斯はまだ氷と雪にとざされていた。早朝、劉英俊は戦友たちと三台の砲車をひいて、市の郊外の大通りを訓練にむかった。バスの停留所の付近にさしかかったとき、劉英俊のひいていた砲車の馬が、自動車の警笛におどろいて突然狂ったように走りだ

した。ちょうど登校、出勤の時間で、大通りには車と人が川の流れるように往き来していた。その人の群れにむかつて馬は突進していった。劉英俊は肩でたけり狂う馬に思いきりぶちあたり、馬車を大通りの左側の小道に引きいれて、やっと事故をくいとめた。だが、馬はまたその凍りついた小道のうえを走りだした。劉英俊はたずなを思いきってひっぱった。からだは車と馬にひきずられた。このとき、見ていた人たちが大声で叫んだ。「早く手をはなせ！ 早くはなすんだ！」 つつ走る砲車の前方に六人の子供が立ちすくんでいた。子供たちの生命が危い。劉英俊はたずなを腕にまきつけ、力いっぱいひっぱって馬を棒立ちにさせ、車のながえをつかんで両足をながえの下にさしこみ、馬の後ろ足を力いっぱい蹴りあげた。車と馬はひっくりかえって、六人の子供たちの生命は救われた。だが、劉英俊同志はひっくりかえった車の下敷きになって重傷を負った。

この、身をすてて、人の生命を救った英雄的な行為を目にした人びとは、強く心をうたれ、いそいで劉英俊のところにかけよってきてたすけ起こし、付近の病院へはこんだ。このとき、バスを待っていた乗客はバスに乘らず、出勤の労働者は出勤せず、登校の学生は学校にゆかず、劉英俊の英雄的な行為にすっかり感動して、かれのあとについていった。「あの人は誰だ

ろう？ なんていう名前だろう？」みんなは口ぐちにたずねあった。「あの人はわたしたちの兄弟です！」ひとりの中年婦人が目に涙をうかべて答えた。病院のまえには、みるみるうちに数百名の大衆と戦士が集まってき、つきつきとこの英雄に輸血を申し出た。

「どうしてもかれを助けよう！」

「助けることができるのなら、なんでも出そう！」

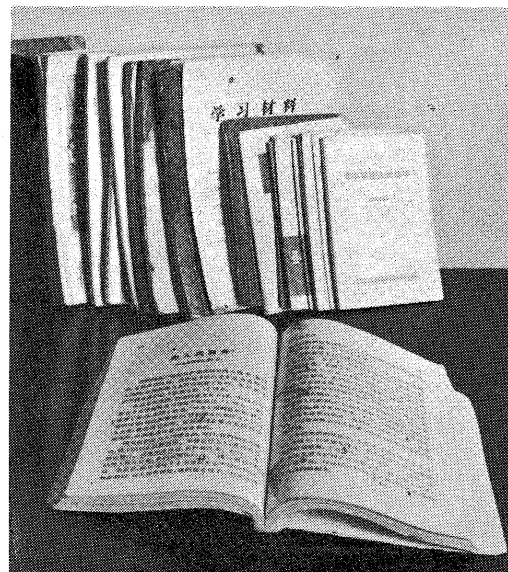
外科の手術室では、英雄を救う緊張したたかいはじまった。血液や酸素、急救薬をつんだ急救車がつきつきと市内の各病院からやってきた。三時間あまりがすぎた。だが、傷は重く、あらゆる処置のかいもなく、劉英俊は光榮ある死をとげた。わずか二十一歳であった。

佳木斯市の各界人民の手で盛大な追悼大会が催された。人びとは劉英俊の遺体を佳木斯に埋葬してほしいといい、大会に出席した英雄の母朱秀蘭のところに代表がいつて、「劉英俊はあなたの息子であり、わたしたち佳木斯の三十万の人民の息子です。かれはわたしたちのために犠牲になったのです。わたしたちは永遠にかれを記念し、かれに学び、かれのこの赤心をわたしたち三十万の人民の心と結びつけておきたいのです」と申し出た。劉英俊の母は、「あの子を祖国の防衛に送りだしたのはわたしです。いま佳木斯の人びとがあの子を必要としているの



蔡 永 祥

ですから、わたしはあの子を佳木斯の人びとにのこしてゆきます」といった。
英雄を記念するため、人びとは劉英俊が犠牲になった場所に松を植え、木のまわりに星形の花壇をつくった。そして、老人や子供たちがかかさずやってきて水をやっている。人びとはここを通るとき、みな尊敬のまなざしでこの松をながめて英雄をしのんでいる。
劉英俊に学ぶ運動が、全軍で、全国人民のあいだでくりひろげられている。劉英俊同志はわれわれのりっぱな手本だ。かれのように限りなく毛主席を熱愛し、かれのように毛主席の著作を活学活用し、毛主席のりっぱな戦士、りっぱな学生にならない、とみんなはいっている。



蔡永祥同志が学んだ毛主席の著作

学习为人民服务，
通过学习为人民服务，又使我深深的体会到毛主席的是个革命家，确有其理，有了毛泽东思想，眼明心亮，毛泽东思想光芒万丈，做到真正把毛泽东思想学到手，以毛泽东思想作为自己行动的指南。

蔡永祥同志が『人民に奉仕する』を学習して書いた体得

ひたすら公のためにつくした

共産主義の戦士——蔡永祥

蔡永祥が紅衛兵の専用列車を救うために、壮烈な最期をとげたというニュースが春雷のように祖国の各地に伝わった。钱塘江のほとりには赤旗がへんぽんとひるがえり、人の群れが潮のようにおしよせた。東海の前線、天山のすそ、珠江のほとり、長白山のふもとからやってきた紅衛兵の小勇将たちは、限らない尊敬の気持ちを抱いて、つぎつぎと英雄が犠牲になった钱塘江大鉄橋へ向かい、ひたすら公のためにつくした共産主義の戦士、プロレタリア文化大革命の忠実な守り手蔡永祥烈士に学び、敬意をあらわした。

小勇将たちは解放軍の戦士のように隊列をととのえ、烈士が命をささげた大鉄橋の南端にごそかに立った。命をかけてこの大鉄橋を守り、この革命大交流の交通の要衝を守って、自分たちを無事に北京へ送りとどけ、日夜思いをはせていた毛主席に会わせてくれた人のことを思うと、かれらの胸は感動でいっぱいになった。かれらはいつまでも記念にのこすために、烈士

の血に染まった石をひろって小箱にいれ、赤い絹の布でしっかりとつつんだ。小勇将たちは、蔡永祥烈士が歩哨に立っていた場所や生前の所属分隊である第四分隊を訪れた。烈士が使っていたベッド、銃架、よく毛主席の著作を学んだ木の小屋、学習の体得を書いた机……どれもこれもかれらに限りない追憶の情を引きおこさせた。

小勇将たちは誓った。共産主義の列車が驍進するのを保証するために、路盤の石になり、一生涯鉄路を守る哨兵になろう。

蔡永祥の戦友が悲しみをこらえて烈士の輝かしいおこないの数々を話してくれた。小勇将たちは涙を流しながらじっと聞いていた。この欧陽海①のような英雄の感動的な生涯がつぎつぎ

① 欧陽海は湖南省桂陽県の貧農の家に生まれた。一九五八年に中国人民解放軍に参加し、一九六〇年に中国共産党に入党した。かれは、毛主席の著作を真剣に学習し、困難にめげず鍛練にはげみ、積極的に仕事をして、何度も功績を立て表彰された。一九六二年に分隊長になった。一九六三年十一月十八日、行軍で踏切りをわたろうとしたとき、砲兵中隊の砲車をひいていた馬が列車の汽笛におどろき、線路に立ちふさがって動かなくなった。この危機一髪のとくに、かれは、わが身をかえりみず線路にとびだして、馬を押しのけ、列車が転覆するのをふせぎ、乗客の安全をまもった。だがかれは重傷を負って、壮烈な最期をとうげた。かれは五好戦士の尖兵、愛民模範として追認された。

とかれらのまぶたにうかんできた。

毛沢東思想にはぐくまれて育つ

蔡永祥は安徽省肥東県の貧農アレンホイ フォイトンの家に生まれた。父は小さいときから地主の牛飼いや下働きをし、母は物もらいに歩いたり、地主の女中になったり、資本家のところで十数年も働いたりして、ひどい抑圧と搾取をうけてきた。解放後、一家は共産党と毛主席に苦しみのなかから救われ、日一日とよい暮らしができるようになった。母はいつも旧社会での苦しみにみちた家の歴史をかれに話してきかせ、「永祥や、いまのしあわせ、むかしの苦しみを忘れず、いつまでも毛主席の話をよく聞き、いつまでも毛主席についていくんだよ」といった。

一九五八年、十歳になった蔡永祥が郷里の小学校にあがっていったときのこと。

ある日、国語の時間に、先生がわざわざ赤いチョークで黒板に教科書の文章をていねいに写しとり、「さあ、きょうは『東方紅』をつづけて勉強しよう。まずだれかに読んでもらおうか」といった。

「はこー」

「はい!」……

子供たちはわれがちに数十の小さな手をあげた。なかでも蔡永祥の手がいちばん高く、声もいちばん大きかった。かれは、自分をあててくれなかったらいつまでもおろさないといったように、左手に教科書を持ち、右手を頭のうえに高くあげていた。

「よし、蔡永祥に読んでもらおう」

「東は赤い、日がのぼる

中国に毛沢東があらわれ

人民に幸福をもたらす フールハイヨー

かれは人民の大きな救いの星だ」……

蔡永祥は偉大な指導者にたいする限りない敬愛の気持ちを胸にいだいて、声高らかに読んだ。級友たちはみな、かれが『東方紅』をいちばん愛読しており、教室で読むだけでなく、放課後、家へかえる道々でも読んだり歌ったりしているのを知っていた。蔡永祥が読み終わると、先生が「永祥、どうしてそんなに『東方紅』が好きなのか、みんなに話してくれないかね」といった。

蔡永祥は目に涙をうかべて、「毛主席はぼくたちの救いの星です! 人が人を食う旧社会で、父さんは地主の牛飼いをやらされ、母さんは資本家のところで働かされて牛や馬のようにいじめられてきました。……毛主席がやってこられて、ぼくの家はやっと救われ、しあわせな生活ができるようになりました。毛主席がおられなかったら蔡永祥もいませんでした。ぼくはけっして、けっして偉大な救いの星毛主席のことを忘れません……」と感激に声をふるわせて答えた。

話が終わると、子供たちは声をそろえて歌いだした。「東は赤い、日がのぼる。中国に毛沢東があらわれ……」

熱情にあふれた力強い歌声は、広びろとした田野、けわしい山々、深い密林、はてしない海原をこえて、北京へとび、毛主席のそばへとび、全世界へとんでいった。

蔡永祥は小さいときから毛主席を熱愛していた。かれは兄からもらった毛主席のバッジを胸につけ、また毛主席の写真をノートにはって、「ぼくは毎日毛主席に会えるんだ」とうれしそうにいった。

かれは深い階級感情をもって、毛主席の著作、とくに「老三篇」を愛読した。民兵に参加

してからは、畑で野良仕事をしたり、山にたきぎをとりに行ったり、訓練や会議にでたりするとき、いつも「老三篇」をもっていき、休みの時間になると、みんなにそれを読んできかせた。かれは、『人民に奉仕する』をくりかえし学び、学んでは活用した。

ある日、雷鋒の物語を借りてきた蔡永祥は、胸をはずませながらもなんども読みかえした。そして、ある民兵に、「雷鋒はぼくたちのりっぱな手本だ。ぼくは雷鋒のように、毛主席の教えにしたがい、毛主席のりっぱな戦士になるんだ」といった。

一九六四年十月、近所の生産隊のワラ山が突然燃えだした。蔡永祥は炎を見ると水おけをかついでかけだした。「おまえは小さいんだから行くな」と村の人たちがとめたが、かれはふりむきもせず、現場へとんでいき、燃えさかるワラ山のうえにとびのって、かついできた水をぶちかけた。いつのまにか火が服に燃えうつっていたが、社員たちにいわれるまですこしも気がつかなかった。かれはおけの水を頭からかぶると、ひと息もいれずにこの大火を消しとめるまでまたたかいつづけた。

冬のある日、生産隊の貯水池に穴があいて水が漏れだした。蔡永祥はそれを見つけると、まっ先に氷を割って池にとびこんでその穴をふさいだ。社員たちはみな、「集団を愛するりっぱ

な社員だ」といって、かれをたたえた。だが、かれは「雷鋒にくらべたら、およびもつきません」と謙虚に答えた。

偉大な毛沢東思想の陽光と雨露にはぐくまれて、若い蔡永祥はすくすくと育っていった。

一九六五年十二月十五日、どらや太鼓がにぎやかに鳴りひびき、爆竹がつきつぎとうちあげられるなかを、人びとは蔡永祥の入隊を熱烈に見送るため、村をあげて集まってきた。蔡永祥と仲のよい友達が人ごみをかきわけて出てきて、かれの手をかく握りしめ、「永祥、部隊にいったら雷鋒のようになりっぱな戦士になってくれよ」といった。

蔡永祥は目を細めてうれしそうに微笑み、なんでもうなずいて階級的兄弟の祝いに応えた。

毛主席は心のなかの赤い太陽

一九六六年二月八日、銭塘江大鉄橋の守備にあたっていた第三中隊の戦士たちは、新しくきた戦士たちを熱烈に迎えた。ひとりの中ぐらいの体つききびきびとした青年がにこにこ笑いながら宿舎にはいつてきた。かれは部屋にはいるとベッドの整頓もせず、お茶ものまずに、まくらもとや壁にはられた毛主席の語録をくいいるように見つめた。そして、感動に顔をかがや

かせてそれを一つ一つ読みはじめた。この青年はほかでもなく蔡永祥だった。

分隊長はこの質朴でまじめな青年がすっかり好きになり、かれのそばにいて、「きみはなんと名前だね?」とたずねた。蔡永祥は安徽なまり丸出しで答えた。

分隊長は若くて活発な戦友をつぶさに見ながらまた、「いくつかね?」と聞いた。

「十八です」

「満でかい?」

「いいえ、満では十七で入隊年齢に一つたりません。でも、ぼくの家は旧社会でひどい苦しみを受けてきましたから、ぼくには毛主席について革命をやる強い決意があります」

分隊長はこの戦士が高い自覚をもっているのを知っていっしょにベッドのへりに腰をおろし、心をこめて話しあった。蔡永祥は苦難にみちた自分の家の歴史をくわしく話し、永遠に毛主席の話を聞いてがんばる決意でいるといった。

蔡永祥が人民解放軍というこの毛沢東思想の大きな学校にはいったとき、部隊ではちょうど林彪同志の呼びかけにこたえて、政治先行の五原則を大いにつらぬく運動が熱烈におこなわれていた。幹部も戦士も毛主席の著作を手からはなさず、ことばのうえでも行動のうえでも

毛主席の教えにしっかりとしたが、毛主席の著作を活学活用する濃厚な政治的空気は、蔡永祥によい影響をあたえた。かれは古参の同志のように、毛主席の著作を読み、毛主席の教えにしたがい、毛主席の指示どおりに仕事をし、毛主席のりっぱな戦士になろうと心に誓った。

まもなく、中隊で社会主義教育運動がはじまり、蔡永祥は自分の家の歴史を思いおこしながら、罪惡にみちた旧社会を訴えた。そのなん日間か、蔡永祥の心はずっと落ちつかなかった。かれは食事の前後かならず食堂に展示された階級教育の写真を見に行った。ある戦友が「よく見飽きないな」とかれに聞いた。かれは、「べつに写真がいいからではないさ。写真にでている階級の苦しみ、血と涙の恨みを毎日見、毎日考えなければならぬのだ。ぼくは見れば見るほど、考えれば考えるほどますます毛主席を熱愛し、毛主席の著作を愛読するようになってくる」「毛主席がいたからこそ蔡永祥もいたのだ。毛主席はぼくの心のなかの赤い太陽だ!」といった。

かれは『毛沢東著作選』をもらったとき、うれしくてたまらず、ひとにあらうたびに「ぼくは宝の書を手にいれたよ」といった。それからなん日かたって、かれは『毛沢東著作選』をしっ

かりと手に持ち、毛主席にたいする限りない尊敬と熱愛の気持ちをいだいて入隊後はじめての写真をつとした。

蔡永祥はむさぼるように毛主席の著作を学んだ。入隊後最初の春節（旧正月）を迎えたとき、農村から都市にでてきたばかりの多くの新しい戦士たちは町へでてぶらぶらするつもりでいた。だが、若い蔡永祥は朝起きると、すぐに小さな机にむかつて毛主席の著作の学習をはじめた。ほかの人が遊びに行こうとかれを誘ったが、かれは、「春節は一年のはじめで、いちばん大切なときだ。毛主席の著作を学んで春節をむかえることは、なによりも意義がある」といつてことわった。蔡永祥をみならって、多くの新しい戦士たちもいっしょに学習にくわわった。春節の四日間の休暇に、かれはとうとう一步も外へでなかった。このように一日もはやく毛沢東思想を身につけようとしている戦士を、分隊長は心から支持し、かれの希望をききいれて、毎晩消灯後に街灯の下でなおしばらく学習することを許した。だが、毛主席の著作の学習をさしせまって必要としていた蔡永祥には、これでもまだまだ不十分だった。

ある日の夜ふけ、分隊長が歩哨を交代するため目をさますと、蔡永祥のベッドがからになっていた。街灯の下や階段にもいなかった。分隊長は兵舎の周囲を見てまわった。そのとき、

大鉄橋の橋脚のわきにある貯蔵室を改造した歩哨所の戸のすきまから光がひとすじ漏れているのが目にとまった。そっと戸を押してみると、はたして蔡永祥がいた。かれは椅子を二つつみ重ねてその上にすわり、天井の小さな電燈の光をたよりに、『毛沢東著作選』を手にして一心に読みふけていた。あまり夢中なので、せまくて低い歩哨所のむしあつさもすっかり忘れており、豆つぶのような汗が顔中ににじみでていた。分隊長がはいっていくと、かれはびっくりしたようにふりむき、「分隊長……」と親しみをこめていった。

分隊長は胸がつまり、しばらくのあいだことばがでてこなかった。かれが目にしたのは、灯火の下で夜のふけるまで読書する光景だけでなく、毛沢東思想にはぐくまれて育つ共産主義の新しい人間の生き生きとした姿だった。「小蔡つづけたまえ、しっかりと学ぶんだ！」分隊長は感動していった。

蔡永祥ははずかしそうに、「安心してください、分隊長。これが終わったらすぐに寝ますから」と答えた。

分隊長が大鉄橋にあがってふりかえってみると、歩哨所のなかからなお光がひとすじ漏れていた。

ある日、中隊で『毛主席語録』を配布する、という長いあいだ待ちのぞんでいたすばらしい知らせが伝わってきた。ちょうどその日、蔡永祥はひどい風邪にかかり、高い熱をだして寝ていたが、『毛主席語録』をとりにくるようにと聞くと、いそいでベッドからとび起きた。

分隊長が「体のぐあいがよくないんだし、雨もひどいから、ほかの同志にとってきてもらいたらい」とすすめたが、蔡永祥は上衣をひっかけながら、「これはすばらしい事だから、自分でいってもらってきます」といって走っていった。まっ赤な『毛主席語録』を手にして、蔡永祥はうれしくてたまらず、宝のようにいつもはだ身はなさず持つてあるいた。

蔡永祥は二年しか学校にいなかったたので、学習するうえで、多くの困難があった。だが、かれは、「一日ぐらい飯をぬいてもかまわないが、一日でも毛主席の著作の学習をおこたるところとは絶対にできない」といって、根気よくこつこつと学び、学んではそれを思いきり用いた。読めない字にぶつかると、同音の字で読みかたをしるしたり、記号をつけたりしておぼえ、わからない字句にぶつかると、分隊の他の同志に教えてもらった。かれは、ふだんの日には、暇をみつけて学習し、休みの日は十分に時間をとって学習し、歩哨から帰ってからも時間をつくって学習した。かれはいつも同志たちに、「毛主席の教えにしたがえば心のなかが明る

くなり、毛主席の著作を読むと力がわいてくる。ぼくは一生涯毛主席の著作を読み、毛主席について革命をやるのだ！」と語った。

銭塘江大鉄橋の守備についている日々、蔡永祥は片時も毛主席のことを忘れなかった。朝、まっ赤な太陽が東からのぼり、まばゆい光を放ちはじめると、かれは小おどりしながら今東方紅を歌った。夜、空に星が美しく輝きはじめると、かれは心から毛主席を思った。そして、つぎのような歌をつくった。

空の星は美しく輝き

一つ一つが北斗星にむかう

どんな明るい星も毛主席にはおよばない

わが心のなかのただ一つの星 毛主席

空の星は美しく輝き

大鉄橋に立って北京を望む

北京の天安門を望む

われわれの偉大な救いの星 毛主席

人民に青春をささげる

新しい軍服を着、赤い星のついた帽子をかぶり、赤い襟章をつけたばかりのころ、蔡永祥は、もし百戦錬磨の指導者の警備兵になって革命の伝統を学べたらどんなにすばらしいことだろう！それがだめだったら、戦車の操縦か自動車の運転を習おうと無邪気に考えていた。そこで、指導部から錢塘江大鉄橋の守備の任務があたえられたとき、かれはいささかがっかりした。最初の分隊会議で、かれは分隊の戦友たちといっしょに「人民に奉仕する」を学んだ。分隊長は「われわれのこの部隊は、完全に人民を解放するための部隊であり、徹底的に人民の利益のために働く部隊である」という毛主席の教えを一字一字ていねいに読みあげ、張思徳の輝かしいおこないの数々を話した。蔡永祥は耳を傾けて聞きながら、それを胸にしっかりと刻みつけた。かれははじめての発言で、「張思徳はほんとうにりっぱです。ぼくも張思徳のように人民に奉仕します」と感動して語った。そのあとで、かれはまた、小隊長に、「人間になるからには張思徳のような人間にならなければなりません。かれは毛主席の話をものともよく聞きました。分隊長を命ぜられると、全心をうちこんでその分隊をりっぱに導き、炭焼きを命ぜら

れると、その仕事にまじめにとりくみました。いま、ぼくは指導部から大鉄橋を守る任務をあたえられましたが、ぼくはかならず大鉄橋を守る張思徳になつてみせます」と誓った。

張思徳はなにをやるにもそれにすべてをうちこんだが、蔡永祥もかれを手本にして、大鉄橋の守備に全力をそそいだ。大鉄橋、人民の錢塘江大鉄橋は、中隊の古参の同志たちが長年らい風雨にさらされながら守りぬき、祖国の社会主義建設に貢献させてきた。蔡永祥は、古参の同志の銃をうけついで歩哨に立つようになったのだ。かれは戦友に、「ぼくは悪いやつが石ひとつこの大鉄橋にぶつけることも絶対に許さない」といった。

ある晩、勤務からもどり、服を脱いで床にはいるうとしてみると、橋脚の付近に異常があるという知らせがきた。かれは分隊長が人をつれて捜査にいこうとしているのを見て、上衣も着ずにベッドからとびおり、銃をとってすばやく捜査隊の先頭に立った。そして勇敢に背丈ほどもある深い葦をかきわけて橋脚の方へむかった。蔡永祥はこのように大鉄橋を自分の命より大切にしていた。かれは日記になんとなく、青春を大鉄橋にささげ、人民にささげるのだと書いていた。

蔡永祥は張思徳を手本にして、ひたすら公のため、人民のためにつくし、自分よりも同志や

集団にいつそう関心をよせていた。かれはいつも、革命のために少しでも多くの力を出せれば
ぼくは楽しいし、人民のために少しでも多くの仕事ができればぼくは幸福だ、といっていた。

日曜日やひまなときには、かれはいつも先に立って歩哨所や便所を掃除した。真夏に外へ労働
にいくと、かれはやつくような暑さやのどのかきをがまんして、自分のムギワラ帽子や水
筒や扇子を同志たちにわたした。外出するとき、かれはわずかなバス代さえ惜しんだが、自分
の手当で毛主席の著作を買ってきて、同志たちにおくった。戦友たちは、「蔡永祥同志の頭には
革命のことだけがあり、他人のことだけがあつて、自分のことはすこしもない」といった。

かれは、あふれるような熱情をもつて、どこにいても人民大衆のためによい事を行った。大
鉄橋の自動車道路をわたるとき、かれは通行人の荷物をかついでやつたり、車のあと押しをし
てやつたりした。ある日、労働しているとき、くぎで左足をけがした。傷にばい菌がはいった
ため、足はまっ赤に腫れあがつて、針で刺したように痛んだ。だがかれはひとことも痛いとは
いわなかった。入院中、かれの病状は「一級看護」だったが、看護婦長が洗面用の水を運んで
いくと、かれは「ぼくはたいしたことはありません。自分でおりて洗えます。ですから、病氣
の重い同志たちをみてあげてください」といってことわつた。看護婦が食事を持っていくと、

かれはそれもことわりつづけ、いつも痛さをこらえ、額に汗をにじませて、びっこをひきなが
ら食堂へ食事をしにいった。

足が痛み、傷がひどくなつても、蔡永祥は毛主席の著作の学習をけつしておろそかにしな
かつた。かれは入院しているあいだの時間を利用して、毛主席の著作をむさぼるように学んだ。
医者や看護婦が休むようにすすめても、かれはいつも、「毛主席の著作を学習することも、思
想を改造することも、人民に奉仕することも休むわけにはいきません。いきているからには学
ばなければならず、学んだからには用いなければなりません」と真剣に答えた。かれはこのよ
うに毛主席を限りなく熱愛し、毛沢東思想を限りなく熱愛して、「只争朝夕^{ひたすらとまどなく}」という革命
精神で自分の主観世界を改造したのである。

わずか九日間の入院期間中、かれは多くのよい事をして、ひたすら公のためにつくす
毛主席のりっぱな戦士のすぐれた品性を十分にあらわした。入院した翌日、夜があげはじめる
と、かれはそつと起きて、痛さをこらえながら、床をふいたり、水をくんだりして、汗でびっ
しりになるまで働いた。当直の看護婦がこれを見て、「蔡永祥同志、あなたはなぜこんなに
早く起きたのですか」と心配して聞いた。「仕事のことを思いだしたらねむれなくなつてしま

ったんです」とかれは笑って答えた。

蔡永祥は同志に心から関心をほらった。ある重病の同志が手術のあと不便そうにしているのを見て、かれは自分の傷口の痛みをこらえて、食事を運んだり、お湯をくんでやったりした。その同志は感動して涙を流しながら、「蔡永祥同志、あなたも病氣なのに、わたしのことをいろいろと心配してくれて……」といった。蔡永祥は、「『革命の部隊のすべてのものは、たがい心にくばりあい、いたわりあい、助けあわなければならない』と毛主席は教えています、ぼくはそのとおりをやっただけです」と答えた。

傷はまだ完全にはなおっていないかったが、かれは中隊のことが気にかかったので、日くりあげて退院した。ある日、病院に治療にいったかえり、湖滨の停留場でバスを待っていると、おばあさんがお金を忘れてキップが買えずにこまっていた。かれはこれを見て、もちあわせの二十銭をだしておばあさんにキップを買ってあげ、自分は足の痛みをこらえて、五キロ以上もある道のあるいてもどった。

ある日の夜ふけ、歩哨からかえってきた蔡永祥はいつものように街灯の下で毛主席の著作を学習しはじめた。第五分隊長の蔣其華がもどって休むようにすすめたが、かれは蔣其華の手を

とって、語録の一節を指さしながら、「分隊長、毛主席はほんとうにすばらしいことをいっています！『すこしばかりよい事をするのはさして難しいことではない。難しいのは一生涯悪い事をせず、よい事をし……』」といった。蔣其華が「まったくそのとおりだ、一生涯よい事をするのはほんとうに難しいことだ」というと、「難しいことは難しいですが、毛主席の話を真剣に聞きさえすれば、かならずできると思います」と蔡永祥はつつけていった。

私心を大いにうち破り、

公の精神を大いにうち立てる

蔡永祥は、思想の革命化をすすめるうえで、自分にたいしてきびしく要求し、よい事をしてますこしもほこらず、成績をあげても仕事に欠点がないかときがした。かれは「老三篇」を座右銘として、私心を大いにうち破り、公の精神を大いにうち立て、けっして私心と公の精神を共存させるようなことはしなかった。「毛主席の著作を学習するときはかならず魂にふれなければならない。革命戦士の頭のなかにほんのわずかの私心雑念があってもいけないのだ」とかれはいった。

蔡永祥はいつも「完全」「徹底」と二つの「極度」をもって自分に要求し、張思德、ベチュン①、雷鋒を手本にして自分の言動をくらべ検査した。ある日の昼休み、連続数日の夜間訓練でくたくたになり、ベッドに横になっていると、突然、中隊で銅っている二頭のブタの鳴き声が聞こえてきた。かれはブタがエサをほしがっているのだということを知っていたが、どうせ飼育係がいるのだからと思って、起きあがらなかった。しばらくたってもブタはなおも鳴きつづけている。かれはもうこれ以上休んでいるわけにはいかなかった。知っていて知らぬ顔

① ノーマン・ベチュンはカナダ共産党員で、有名な医師であった。一九三六年、ドイツとイタリアのファシスト強盗どもがスペインに侵入したとき、かれは、ファシズムに反対するスペイン人民に奉仕するため、みずから前線におもむいた。中国の抗日戦争が勃発すると、一九三八年のはじめに、かれは医療隊をひきいて中国にやつてき、同年の三、四月ごろ延安につき、その後まもなく山西・察哈爾・河北辺区におもむいた。ベチュン同志は高度の国際精神と仕事にたいする献身的な熱意をもって二年近く八路軍の負傷兵に奉仕した。そして、救急手術のさい感染し、治療の効なく、一九三九年十一月十二日、河北省の唐県で逝去した。

をしているのは、「仕事にたいする極度の責任感」だろうか。これでどうして完全に、徹底的に人民の利益のために働くといえるだろうか。そう思うと、かれはベッドからとびおりてブタにエサをやりにいった。

これはもともとよい事なのだが、かれは第六分隊長と話しあったとき、自己批判をした。第六分隊長が「きみはほめられるべきなのに、どうして自己批判などするのかね」と聞くと、蔡永祥は、「自己批判すべきです。自分の思想をえぐりだしてみると、ブタにエサをやるまえに、『なまける』という考えがありました。ベチュン同志はあのような年で、万里を遠しとせずにやってこられ、われわれが日本侵略者をやっつけるのを援助してくれました。しかし、ぼくは若いのにほんのすこしか離れていないブタ小屋へもいこうとしませんでした。この二つを対照してみると、ひじょうにはずかしい思いがします。分隊長、あなたはふりい同志ですから、ぼくをもっともっと援助してください」と真剣な面持ちでいった。

蔡永祥は「老三篇」を武器にして意識的に思想を改造した。「毛主席が教えているように、どんな個人にとっても、誤りは避けがたい。ぼくに欠点や誤りがないなどということは絶対にありえないのだ」といって、かれはいつもまわりの同志から意見を聞き、欠点や誤りをみつけ

て改めることを、党と人民と革命にたいして責任をもつことだと考え、同志からの批判を自分にたいするもっとも大きな階級的友愛だと考えていた。

ある日曜日、蔡永祥は休暇をもらってセッケンを買いに外出した。帰る途中、かれは、労働者が石炭を運んでいるのを見て、そでをたくりあげ、ズボンをまくり、靴を脱いでそれを手伝った。あまり夢中になったので、時間どおりに中隊へ帰ることをすっかり忘れてしまった。帰っていくと、分隊長は時間におくれるべきではないといってかれを批判した。かれはいまやってきたよい事を分隊長に話そうとは思わなかったが、批判されるとちよつと不満だった。午後、みんなが休んでいるとき、かれは『毛主席語録』をもって外に出て、「人民に奉仕する」のなかの一節をくりかえし読んでみた。「われわれは人民に奉仕するものであるから、もし自分に欠点があれば、人からの批判と指摘をおそれない。」思想上のひっかかりがすっかりなくなった。かれは、分隊長の批判は心からうけいれるべきだ、どんなによい事をして、時間におくれたのはまちがいだ、ということに気づいた。

このことがあつてまもなく、分隊長は蔡永祥のおくれたわけを知り、分隊会議でかれをたたえ、自己批判した。蔡永祥は、「分隊長、あなたはぼくのやった事を批判したのではなく、ぼ

くのおくれたことを批判したのです。分隊長の批判はまったく正しいです」と心からいった。

この小さなできごと、短かいことばのなかに、共産主義思想の火花がきらめいていた。

蔡永祥はこのように「老三篇」の思想を自分の魂とし、私心をうち破り、公の精神をうち立てた。犠牲になる数日まえ、かれはある戦友と快板（歌物語の一種、口語を用い、竹の板などで拍子を取りながら、早い調子で歌う）をつくり、あふれるような熱情をこめて「老三篇」をたたえた。

「老三篇」は宝だ

一字一句がすばらしい

労働兵にはかせない

学べば学ぶほど目がはつきりし、心がひらける

「老三篇」よ、「老三篇」

しっかり心に刻んでおく

「老三篇」を思いきり使えば

心はもつとも赤く、目はもつとも輝き

路線がはっきりし、方向が見わけられ
革命をやる力がでてる

「胸に全世界を思う」

偉大な「老三篇」はたえず若い戦士の視野を広げていった。

「大鉄橋に立って胸に全世界を思う」これは、一九六六年五月、蔡永祥がベチューンの国際主義精神を学んだときに書いた体得である。かれは『ベチューンを記念する』をくりかえし読み、「世界革命を支援するため、自分のすべての力と貴い青春をささげる」という豪壮なことを書きとめた。

杭州市の階級教育展示館を参観し、人民を虐殺する帝国主義と反動派の血なまぐさい犯罪行為を見たあと、蔡永祥は座談会でこう語った。「世界ではまだ多くの人民が解放されておらず、いまなお苦しみにあえぎ、牛馬にも劣る生活を送っている。ぼくは、徹底的な国内革命派と国際革命派になることを誓う」

「老三篇」はかれの頭のなかに大きな公の精神をうち立てた。それがどれほど大きなもので

あったかは、かれの戦友夏英敏が「世界をすっぱり包んでしまおうのだ！」といている。

ある日、蔡永祥は夏英敏と肩をならべて钱塘江大鉄橋のうえを歩きながら、「この大鉄橋は北京に通じ、ベトナムに通じているのだ。毛主席はぼくたちにこの橋を守る任務をあたえているが、それは祖国のプロレタリア階級の山河を守り、世界革命を支援せよということなのだ」と語った。かれが考えているのは、階級の大事、党の大事、国家の大事、世界の大事だった。

アメリカ帝国主義がベトナム侵略戦争を「エスカレート」するたびに、蔡永祥は、しっかりと準備をととのえて、命令がくだったらすぐに戦場へいこうと考えていた。そこで、かれは、いっそう毛主席の著作の学習にはげみ、プロレタリア階級の自覚を高め、てき弾、銃剣術、水泳の訓練にいっそう力をいれ、敵を倒す腕をみがいた。かれはなんども、前線へ自分を派遣してほしいと指導部に要求した。「もし許可されたら、敵を思いきりやつつけてやる。許可されなくても、警戒心を百倍もたかめてしっかりと大鉄橋を守る」とかれはいった。

蔡永祥はいったとおりに実践した。かれはいつも毛主席の階級闘争にかんする論述を学んで「敵」という一字を頭のなかにいれておき、たえず大鉄橋の枕木、レール、大くぎの一つ一つに注意をはらった。夜の歩哨で視界がきかないときは、体半分ほどの深さの穴のなかにかが

み、顔を地面につけて水面の方を見ながら、注意深く観察した。ある晩、強い川風が吹き、どしゃぶりの雨になった。ちょうど川縁を巡回勤務にあたっていた蔡永祥は全身びしょぬれになってしまった。近くに風雨をよける歩哨所があったが、かれはもっとよく周囲のすべての状況を観察するために、そのまま雨のなかを立ちつづけた。巡察にやってきた戦友が、この階級的兄弟のことを心配してしばらく歩哨所へもどるようすすめた。だが、蔡永祥は動こうとせず、「すこしばかりぬれたってなんでもない。服はぬれたらかわかせばよいが、大鉄橋が破壊されたら、人民にとってどんなに大きな損失になるかわからない」といった。

欧陽海のような英雄になる

蔡永祥は、どのようなときでも英雄を手本にして、英雄に学び、英雄の道をあゆみ、英雄がやったような事績をつくりあげた。

一九六六年五月、小隊で欧陽海に学ぶ運動がおこなわれた。やっと欧陽海の物語を手にいれた蔡永祥は、暇さえあれば橋脚の下へいって、むさぼるようにそれを読んだ。夢中になると、焼けつくようなあつさも忘れ、顔の汗をふくことも忘れた。汽車が汽笛をならしながら大鉄橋

を通りすぎるとき、はじめて気がついたようにタオルで汗をぬぐった。

欧陽海の旧社会での苦しみ、血と涙でつづられた家の歴史に、蔡永祥は胸を強くうたれ、思わず涙があふれでてきた。「ぼくたちは同じ苦しみのつるになった瓜なのだ……」かれは感激してつぶやいた。

同じ分隊の戦友還正学がこのようすを見て、蔡永祥にたずねると、かれは「この本は、欧陽海がどのようにして毛主席の著作を活学活用したのか、どのようにしてすみやかに偉大な共産主義の戦士になったのかを描いている。ぼくたちはそれをよく学び、英雄のようにやらなければならぬ」と答えた。

そして、列車を救った欧陽海の英雄的な事績を目を輝かせていきいきと話した。かれは英雄を心から尊敬し、「欧陽海はなぜ偉大な共産主義の戦士になったのだろうか。旧社会でひどい苦しみをうけてきたかれは、毛主席の著作をしっかりと活学活用し、ひたすら革命のためにつくし、すべてを人民のためにつくしたからこそ、カギになる大事なとき、勇敢に、確固としてつっこんでいくことができたのだ」といった。

このとき、汽車が耳をつんざくような汽笛を鳴らしながら大鉄橋を通った。蔡永祥は立ちあ

がって、おごそかにいった。「大鉄橋を守っているぼくたちは、橋を守る張思徳にならなければならぬだけでなく、列車を救う欧陽海にならなければならない。もし階級敵が破壊してきたら、ぼくはつっこんでいて敵をやっつけ、列車を救わなければならない。ぼくは欧陽海のように自分をすてて他人のためにつくすのだ」、と。

蔡永祥は新聞で、三二一一さく井隊が鮮血と生命をもって天をもこがす猛火をけしとめ、高生産の天然ガス井戸を救い、新しくきりひらいたガス田を守りぬいた英雄的な事績を読むと、感激にふるえながら、全分隊員に、かならずさく井隊の英雄たちに学ぶと表明し、党と人民に、天がくずれても勇敢にささえ、生きるか死ぬかの瀬戸ぎわにも勇敢につっこんでいくとおごそかに誓った。

このような胸に全世界を思い、ひたすら公のためにつくす英雄的な戦士のまえに、克服することのできない困難やうち破ることのできない敵などあるだろうか。

古い世界を批判する勇将

あらしのようなプロレタリア文化大革命のなかで、毛沢東思想で武装した蔡永祥は一貫して

階級闘争の最前列に立ち、銃をしつかりとにぎって文化大革命を守るとともに、筆をとって積極的にブルジョア階級を批判する闘争に身を投じ、自覚的に勇敢に毛沢東思想を守った。

ある日、かれは病氣にかかり、高い熱をだして寝こんでいた。そのとき、同志たちが、毛沢東思想にあくどい攻撃をくわえた反党・反社会主義・反毛沢東思想の修正主義分子のさまざまな罪状を暴露した新聞記事を読みあげているのを聞いて、胸にはげしい怒りが燃えあがってきた。かれは病氣の苦痛をこらえて、ふとんをはねのけ、ベッドからとびおりるや、社会の反党・反社会主義分子を糾弾する闘争に積極的にくわわった。分隊長がよく休むようにと何度もすすめても、かれは「休んではいられません。戦闘に参加します」といった。

蔡永祥はベッドからおりとすぐに、ポケットから『毛主席語録』を、机の引き出しから便箋をとりだして、発言の準備にとりかかった。かれは「階級と階級闘争」についての毛主席の論述を読みながら心を打たれ、思わず戦友の還正学の手をひっぱっていった。「毛主席はすばらしいことをいっている！このひとにぎりの修正主義分子こそ銃をもたない敵なのだ。かれらは顔では笑っているが、心のなかでは悪いことばかり考えており、ぼくたちの村の反革命分子のいうことなすこととまったく同じだ」そして、かれは、「銃をもった敵が減ばされてから

も、銃をもたない敵は依然として存在するのであって、かれらはかならずわれわれと死に物狂いのたたかいをするであろう。われわれはけっしてこれらの敵を軽んじてはならない……」という毛主席のこの有名なことばを発言原稿のはじめのところにいていねいに書きうつした。

旧社会で苦しみをなめつくしてきたこの貧農の息子は、党と毛主席にどれほど話したいことがあったであろう！ 発言の準備のために、かれは病気の身をおして一生けんめい書きつづけ、便箋をほとんど一冊使い終わってしまった。夜中、還正学が目をさましてひよっとふり返ってみると、蔡永祥のベッドはなおあいていた。そこで大鉄橋のそばへいってみると、蔡永祥が石の上に腰をおろし、顔の汗もふかず、蚊にくわれるのも忘れて橋灯の光で、『毛主席語録』をひらきながら、一心に原稿を書いていた。還正学は蚊を追いつながら、「小蔡、まだ書いているのかい……」と声をかけた。

蔡永祥はびっくりしてふりかえり、「まだ終わらないんだ」と笑っていった。

「体のぐあいがよくないんだから、休まなければだめだよ」

「これぐらいの病気はなんともないさ。戦場では軽傷で前線から退くことはできないよ」
還正学はこれを聞いてひじょうに感動した。かれは、蔡永祥の文化水準があまり高くなく、

発言原稿を書くのに困難があることを知っていたので、「小蔡、きみがいうのをぼくが書いてやろう。そうすれば、はやく終わるし、はやく休めるよ」といった。

「いや！ 自分で書くよ。階級敵とのたたかいを、人にかわってやってもらうわけにはいかないさ」

……

翌日、第四分隊で社会の反党分子を糾弾する大会が開かれた。戦士たちは、はげしいきどおりに燃えてつぎつぎと発言し、反党分子に怒りの弾丸をあびせた。

蔡永祥は怒りにもえながら立ちあがって発言した。かれは、自分の家が解放されたことから祖国が巨大な変化をとげたことまで、英雄的人物の成長から自分の進歩までを話した。

かれは、数えきれないほどの鉄のような事実をもって、反党・反社会主義分子の恥ずべきデマに反駁をくわえた。かれはいった。雷鋒は平凡な持ち場で平凡な事をやったが、なににたよったのか。王杰は危機一髪のとときに自分の命を投げだして民兵を救ったが、なににたよったのか。欧陽海は生死にかかわる重大なときに、列車を救うために英雄的に命をささげたが、なににたよったのか。いずれも毛沢東思想にたよったのだ。ぼくは入隊してまだまもない、だがだ

れのために兵士になったのか、どのように人民に奉仕するのかを知っている。これも毛沢東思想にたよったからだ。「毛沢東思想はわれわれの命の綱であり、毛主席はわれわれの心のなかもっとももっとも赤い太陽だ。毛沢東思想に反対するものとは、それがだれであろうと、われわれはあくまでたたかう」

蔡永祥は階級闘争のなかで毛主席の著作を活学活用し、毛沢東思想というこの照魔鏡と顕微鏡で、香り高い花と毒草とを見分け、妖怪変化を一掃した。かれは悪質映画《逆風千里》を見たとき、戦友の張勤華に、「ひとにぎりの反党分子は人民のつくった飯を食い、人民のつくった服を着ながら、反毛沢東思想の悪い事ばかりやっている。こんなことは絶対に許してはおけない!」といった。かれはまた壁新聞に、「《逆風千里》は大毒草である」という批判文章を書いた。蔡永祥は、毛沢東思想にそむく毒草をすべて批判した。悪質な劇や映画をすべて批判した。みんなはかれを、ふるい世界を批判する勇将だとほめたたえた。

蔡永祥は積極的にブルジョア階級を批判すると同時に、毛沢東思想を大いに宣伝した。かれはよく文芸の出し物をつくって、偉大な党、偉大な指導者毛主席、無敵の毛沢東思想をたたえた。中国共産党第八期中央委員会第十一回総会の公報が発表されると、かれはすぐに快板をつ

くって演じた。

竹の板は歓呼し

激情をこめて公報をうたう

毛主席が革命を呼びかけ

七億人民の心はひとつに結ばれる

いつまでも毛主席にしたがい

妖怪変化をのこらず一掃しよう

かれはどの出し物を演ずるときでもひじょうに真剣だった。「毛沢東思想を宣伝する以上、積極的にやらなければならない」といった。

蔡永祥は「四旧」（搾取階級の古い思想、古い文化、古い風俗、古い習慣）を大いに打ちこわし、妖怪変化を一掃する紅衛兵の革命的行動を断固として支持し、熱情をこめてたたえた。かれは日記にすぎのような詩を書いた。

軍容勇ましく

毛沢東思想で武装した紅衛兵

革命の戦歌がとどろき

妖怪変化は逃げ場を失う

決意もかたくな

階級闘争のなかで先頭にたつ紅衛兵

古い世界を徹底的に打ちこわし

共産主義の光をはなつ

「天がくずれ地が裂けても突き進む」

蔡永祥、この英雄的な戦士の前進してきた一步一步には、毛沢東思想の光が輝いていた。そして、人民が必要としたとき、「天がくずれ地が裂けても突き進んだ」のであった。

一九六六年十月十日の午前一時四十分、当直の葉林昌がぐっすり眠っている蔡永祥をついて、「歩哨の時間だ」と小声でいった。蔡永祥はその声を聞くと、ぱっととびおきて、服装をととのえ、大またで錢塘江大鉄橋の南端の歩哨所へむかった。

プロレタリア文化大革命がはじまってから、毎日どれほど多くの列車が、われわれの偉大な

統帥者毛主席の検閲をうけに行く革命的小勇将の紅衛兵を満載して、錢塘江大鉄橋を通り、祖国の心臓——北京へむかっていったことだろう。また、どれほど多くの列車が、毛主席のそばからもり南方各地へ毛沢東思想を宣伝に行く紅衛兵小勇将を満載して、錢塘江大鉄橋を通りすぎていったことだろう。この革命的大交流の要衝である大鉄橋を、蔡永祥はしっかりと守ってきた。

二時三十四分、紅衛兵をのせた七六四専用列車が南昌の方から大鉄橋へと驀進してきた。列車のヘッドライトに照らし出されて、四〇メートルほど先のレールのうえに太い丸太棒が横たわっているのを、蔡永祥は突然発見した。これは階級敵の破壊活動だ！もしこの丸太をとりぞかなければ、たちまち列車が転覆して、大鉄橋がこわれ、人々が死傷する大事故になる。

この危機一髪のために、蔡永祥は身の危険をもちえりみず、四〇メートル先の障害物にむかって突っこんでいった。

四〇メートル——その一步一步が毛沢東思想の巨大な威力をしめしていた！

四〇メートル——その一步一步がひたすら公につくす共産主義思想の光をはなっていた！

四〇メートル——その一步一步が革命戦士の赤い心を試す試金石だった！

蔡永祥は毛主席のりっぱな戦士の名にはじなかった。かれは突き進んでいって障害物を取りのぞき、紅衛兵を救い、錢塘江大鉄橋を守りぬいた！だが、われわれの親しい戦友、若い蔡永祥同志は壮烈な最期をとげた。

朝やけが東の空を赤く染め、偉大な毛沢東時代のいま一人の英雄的な戦士のけだかい姿がいく億人民のまえにあらわれた。さかまく錢塘江の流れは英雄的な戦士のために高らかに歌い、そそりたつ高山の青松は英雄的な戦士に敬意をあらわした。一人の蔡永祥が犠牲になったが、なん千なん万の蔡永祥が育っている。われわれは毛主席がさしめした方向にそって、英雄の足跡をふみながら、いつまでも前進していかうではないか！

毛主席のりっぱな戦士

1970年 初版発行

定価 80 円

出版者

外 文 出 版 社
(北京阜成門外百万荘)

発行者

中 国 国 際 書 店
(北京 P. O. Box 399)

編号: (日) 11050-61

11-J-753P

0051

